



りとびきに





の等虫京南・蚊・蚤! 時いユカで虫毒

道が入り

※に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重然に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重がられてゐます。 ★ニキビ吹出物に非常によく効くので 大評判の薬です。ニキビや吹出物でお 大評判の薬です。ニキビや吹出物でお でいるができる喜びの糧! ゼヒ を関いるに大きな喜びの糧! ゼヒ



是	吹	
非	出	4
此。	物	ビ
藥	15	•

阪大•京東

館天順谷桃

昭和十七年を送るの辭

ものだと云つて、低 が、歴史は繰返へす につとめて來た私達 しかし多年文化昂揚 て教へられてゐる。 を私達は歴史によつ 低下するといふこと と、文化のレベルが ★戦争がはじまる うか。默つて眺めて 墜ちる天井を支えて に近いと知つても、 よしやそれが不可能 ゐるやうな氣持にな てゐてい」ものだら 現狀をジッと見送つ 下しつ」ある文化の れるものだらうか。

が嚴として刊行の手 限りをつくして來た これが對策に微力の て然るべしである。 つてわが「川柳雜誌 國難到るの時代にあ 文化の低下を憂ひ、 **腰食を忘れて、日本** 立つ位の意氣はあつ 私は過去一年眞に るものである。

あつたことを回顧し ひなき昭和十七年で して聞ひ抜き何等悔 いかを知り、敢然と 達は職域の如何に貪 つに外ならない。私 もそうした表れの一 一種の誇りさへ感ず

をゆるめなかつたの

八低物價政策

後銃 さ隊兵の線戰= られるのも全く低 らたら罰があたる である。不足を云 切れが、百圓にも なつたと云つたと 域にいそしんでみ ならず、各人が職 ころで、バンート 物價政策のおかげ になった、三倍に 物の價額が二倍

それを消極的な格言だとけなした人 たちが、急に泥繩的標語をつくつた ぶれるとは生活を失ふの調ひである 感謝のこくろを實踐にうつさせた古 られて來たが、それこそ米に對する つぶれると明治生れの私たちは教へ めだと思ふ。飯粒をこぼしたら眼が 活をして來た人たちへのいゝ見せし 人の用意

周到さに外ならぬ。

眼がつ

價政策様標である。

九)感

今更のやうにお米へ感謝したり、

も何んのそのだ。このところ、低物 何はなくとも、米さへあれば長期戦 から届けて臭れる。二十一日分で十 たものであるが、近ごろでは配給所 て置いて、あとでそれを貰ひに行つ てゐる。一時は米袋を配給所へ屆け 変混合米二十一日分宛の配給をうけ

個八十五銭だ。全く安いものだ。

440 そまきながらお氣がつかれたら結構 ざるも甚しいと云けわばならぬ。お 位に心得へてゐたのであらう。思は ある。神嘗祭や新嘗祭をただ祭日だ 感謝を慫慂したりしてゐる人たちが

昔の大飢饉の時には小判をくわえて のだと考へてゐたらしい。昔々その 金さへ出せば幾らでも持つて來るも てゐる。都曾人は米け米屋にある、 は氣がつかなかつたと正直に告白し 日常喰べてゐるお米がとれるのだと を眺めた時、こんな草から自分等の のたれ死にをしたものである。 江戸ッ子の漱石け、田圃へ出て船

私の家では家族が六人、それで米

黄金萬能主義で、感謝を忘れた生

り、上すべりのした演説をしたりし は容易に到達しそうにもない。 たところで、質踐するところまでに

と云へば新穀感謝にとどまつて感謝 麥への感謝は果への感謝、果への感 ではない。感謝といふ言葉が流行語 片の標語や宣傳ビラで、片づくもの となって來なければ場だ。世のあり 謝は世のありとあらゆる物への感謝 謝は薩摩芋への感謝、薩摩芋への感 であらう。米への感謝は麥への感謝 とならぬやう特に留意したい。 とあらゆるものへの感謝の心が、一 行事が過ぎたらケロリと忘れること そんな人たちに限つて、新穀感謝

生活の簡素化だ。感謝を忘れぬ生活 要する。太陽を拜む百姓のこくろを 生活についても考へわばウッだ。興 謝の生活は與べられた生活だ。與へ だ。闇のない生活だ。これこそ眞の 心としてこれを書く。 謝される生活にけ容易ならぬ努力を 食の生活に強する。與へる生活、感 られた生活に感謝する以上、興へる ほど平静な生活けない。しかし、感 へられることばかり考へてゐては乞 感謝の生活は同時に欲張らぬ生活

111 树巾 菜隹 言志

紙(十二月八日)……福井哲摄影

社	川	MI	各	集路一	同川	近		昭街	狂		+	草	柳川	母奇午	武	上班	筆隨	1
關係	協・	柳紫	即地	新繃	舟	作		型に	路		月	木	世	を生生	玉	ある。		舒後
がの	柳界展望	- 8	夏柳	76/1 (MG	近柳	柳		七年を	75667		1	徒		分珍泽	Щ	9. 大	0	0
٨	展		壇	221 786		糨				福吉中削	日本		界	失る	研	を和	20	七
4 .	圣	架 5	1 3	刊帶	- A	518		送る:	1	田田島田	訊	然:	ф	ふ名に際	究	篇	語	U
1	1					1	*	の辭	1	田生	<	1	史二	記調で	(FIII)		1	
1	CHO							101		雨水々五			一九		丟			1
1	Č			1 2	11			11	1	樓車庵健	1		Ċ	111		11		
1	페					1		14								11		
1	廻轉椅子			石尾井崎	諸麻	ner:		Tele		官須岩		THE .	-	中高杉	蛭森梅	Safe IEEE	1	路
1	學			白	生	麻生路郎選·		高橋かほる		岡崎崎		西田	戸田	中島生	于 本	沖野岩	出	
1				面人選…	路線選	路郎		カ		白豆柳		rhehr	मार	生如灰	省東塵	岩路	77	郎
1	1			選選	家選	選		3					孤篷	~ 抱研	三魚山	三郎即	交三	生
1	1			1 20	1 1			11		峰秋路	1	1		111		1 1	:	:
8	3	THE P	38	E	3	3		-2	量		=	元	000	888	=	3		-
-	~	-	-	-	~ ~	-		~ ~	1		-	-	-			-	200	~

ニュースがありますけれ… お早お出てなさい……臨

を描くべく、杉山から三、四る菓子鉢一千餘枚へ川柳と繪 局の〇〇にお役に立ち、 伊豫鐵道電氣株式會社經理課 申上て置くが私は畵工でなく 遠ひをしては、いけないから の時である……ことで一寸勘 の豫定で出張して居つた。そ 里離れた陶郷砥部へ約二ヶ月 んだ。私は社用で〇〇〇へ贈 と思へぬ程の大聲で、 柿右衛門と云ふ風體の山田さ 峡の陶郷へまあ來たやうな 陶畵室の外から、 趣味の川柳と繪が時 私を呼 此の 老人 ので、 が無く、 であつただらふと思ふ恰度私

山 前 H Ŧi. 健

譯である。

名品を日向へ乾しならべた風 景を想像すると、粘土細工の 睨むもの、後からその場の光 むもの縁を抱へるもの大空を 地へ、土管へ腰をおろして居 數人の陶業場の人々が石へ大 つた……門前には既に十 から「ようし來たツ」私は走 ところへ、この御註進である にしながら繪筆を奔らせおる つばり陶窯業者のお宅にある 百米離れた、山田さん……や 試験場内で、こ」にはラジオ 額は皆な緊張し、腕を組 朝から東西の風雲を氣 ラジオはその室から 私の作畵室は陶業 りませう」「やるのさ、トコ つてゐた。「先生ツ、どうな 心に、やんはりと覆ひかぶさ あ一つ大きな、「日本は有難 がぐるぐる舞ひする上に、ま 火管制だ」「早速常會を開か 夜から練習や訓練でない、燈 掲る……一面には又た「今 の意氣で一の快哉が、ドット な大きな、戰ひの杭だつた。 何々撃破……續いて響くはみ 込んだ。何々爆撃、何々轟沈 い國だ」の念がみんなの頭に ねばならない」緊張と興奮と 「やつたツ」「强いぞ」「こ な一戰ひだ」のクサビを打ち ラヂオは皆なの心魂へ大き

トンまで、やるのさ」「さう

然と興奮しながら聲高らかに

ざ太平洋の波濤乗り越



(員會洞朽不)氏峯白岡宮る護を邊北

は、 の陶畵奉公慰問に來ておられ 柏門の錚々たる歌人森朝子氏 その場の光景を詠つてお 興謝野晶子氏の高弟、冬

十二月八日の臨時ニュースを ば

られる。

燈火、窯火の管制、 る私は偶然にも同盟通信を勿 特ダネを知りたがる癖の 蒙疆張家口 私は山

け居る狀況と××の異動に依 衷を察し如何にも風雲急を告 日)配達された赤真欄と同時 員四十名を整列させて部隊長 とを再三見くらべた上、從業 にして同盟ニュース欄と別外 ものが來たと血が湧き目を皿 り豫感もありついに來る可き ました。野村來栖兩大使の苦 刻に蒙疆新聞社の號外で知り て居た。丁度其の日 驚×× 圓も奮發して目を通し (十二月八 尚其の夜本社不朽洞會員、ハ 7 ワ 大いに面目を施したる次第、 ポイントを打ち隣組長として 地圖を擴け太平洋に赤ペンで 寄の書店で買求めた新世界大 ルを廻し戦況ニュースを隣組 了深夜まで家内一同でダイヤ 受信機を申込み即刻取付け 放送局へ電話して急設ラジオ 讀み聞かせました。と同時に へも通達と共に聴取に招き最 イ川 一浪君から昨春遠路わざわ のワヒ 柳ウイロー社同人オア アワに住む柳友高

れることの出來ない昭和十六年十二月八月だつた。その日のニュースを何處で、どうし 知つたかー。と、その日の感激を、その日の行動を洩らして貰つた。(編輯局 ス東亞戦争の満一周年を迎へた。

生を昭和聖代に

享けた日本人の

忘れやうとしても

忘 の感激、夜に入つて真剣なる ると、泥の腕を、 る若者もあつた。十二月八日 つでもお召の用意が出來て居 を流して居る老工もあり、い やり めく のだ」中には涙 コスリ上げ 流れて、仕方がなかつた。 かつた。何んとは知らず涙が いて、宿で、 り上つてくるやうに、耳につ 0) 流れが、 真ツ暗な底から盛 なかく眼れな

崎

んとは知らずに涙が………

益々身の堅くなつてゆく

のを

軍部發表には「帝國

海軍

場に着いた。晝食の時間に大

チに送られて私は私の

韶渙酸あらせられた由を承り

聴き乍らでは一分も働けぬ性

えた。私の職業がラデオを

八日未明ハワイ方面の米國艦 隊ならびに航空兵力にたいし

跡紀念碑に参拜し××司令部 に見ました。翌九日早朝蒙疆 冦の戰も追想し神の加護海國 日本の烈々たる緒戦の大戦果 神國日本の有難さを痛感、元 吾が民族の底力」をものにし で川柳塔拙句の如く「九軍神 の大勝と共に吾が海軍獨特の た。先づハワイ眞珠灣大空襲 見直し一層感激を深くしまし 字の上書や一浪君の名刺等を 必殺戰法特種リボ スクラツブブツクより改めて と共にハワイの切手やロー 走せつけ從業員一同五百圓 興奮し明日の の句集をデスクに置き松代 宮殿下の御戰 ニュースを夢 ートの戦果 0) 0)

りました。 にも意義深き八九、兩日であ を肩に街路に出掛けスケッチ て愛用カメラ、エキザクター と奮起を誓ひ矢次ぎ早の戰況 がら吾々從業員家族一同 イトハウスの驚きを想像しな 意味で原地酒の杯を揚げホワ 二世を案じつムラヂオにかじ そして更にハワイの柳友や第 をなし、川柳と共に寫眞報國 軍に深甚なる感謝をし祝杯の りつき緒戦の大勝に感激と皇 ち付いた氣持になりました。 ユースを聞きました。そし 一段

たが爆弾はオアフ島の陸軍飛 てアメリカ艦船二隻撃沈され 「日本空軍真珠灣空襲に際し しかしアメリカ陸海軍は今な ルル爆撃は猛烈を極めて居る の外國電報に「日本軍のホ つて居たものらしい。 激も湧かず全體の昂奮でたぎ にハワイ爆撃丈に對しての感 扱つてあるのでその當時特別 等と同じ活字の大きさで取り ところ他の香港シンガボー ある。今から考えると正直な 決死的大空襲を敢行せり」と 海空權を握つて居る。」又 同じ欄

とうの感銘は元旦の大寫真と 九軍神特別攻撃隊の發表の際 の印象が薄い。やつばりほん ワイ爆撃に對する八日の感激 しい思ひがする。それ程に 合せて居たならばと今更口 重要性とかに就いて今日持ち とかオクラハマと云ふ戦艦の 灣とかオアフ島の陸軍飛行場 上しつくあり」等の文字があ る」「米戦艦オクラハマ號は る。從つて當時僕にして眞珠 ホノルル沖の海戰において炎 以上の死者を出したと云はれ

行場にも降下され三百五十人 る。 が最も强かつたと記憶して居

阪 須 秋

大

存して居るのだが。大本營海 動車の中で讀んだ時だと記憶 その日の第一夕刊を往診の自 もまとまつたラデオ放送では 質であるのでとうくくその して居る。その夕刊を今も保 かつた。はつきり知つたのは ワイ爆撃の事は頭に入らな

中に出勤時間が迫つて來て胸

にと放送されるあわたゞしい

で飛び起きてから次から次

十二月

八日の朝七時のニウ

の高鳴りはそのま」例

の軍

艦 職

> 既に今朝未明のニュースで一 九十九萬九千九百九十九人が 足お先に知つてゐて自分の聞 來る同僚が否日本の九千九百 あたところ、後から出勤して けたりしながら一人昂奮して て」煙草の吸口の方へ火をつ 臨時ニュースを聞き、あわ ハワイ爆撃

庵

ようか。 いたのは第二回目の おありでは御座いませんでし も若しや私と同類項のお方が いたしますが、皆さんの中に た。低い聲でちよつとお導ね といふのがあの時の實相でし にキマリが悪るかつた……… ースであつたことが判り大い 臨時ニュ

奉 天 田 車

十二月八日當地 米英决戦の火蓋切る一が (奉天)で發行 其號外は永く保存すべく大切 された號外の見出しである。

て見て今更ながら感激にひ にしまつてあるのを取り出

のはて迄郵送して吳れた忠臣

店主側

トップを切りほつとして落 心からなる海軍へ國防厭金 よりの五百圓計壹千圓

んなの顔が向いて居た。心な に据え付けたラデオの方へ皆 出かけたところ事務所の中央 慨なのである。所用で銀行 のも外地に居る我々の味ふ感 そんな事が第一に考えられた 帝都はどんな空氣であらうか 地の様子はどうであらうか、 る思ひがした。こんな場合内 らしたが、瞬間身が引き締ま と言ふ私は残念ながら聴きも 今朝のラヂオ聴きましたか」 人が「とうとうやりましたネ 當日會社へ出ると社 員



子艦隊の全滅に、 告ける驚天動地の快ニュース れたのである。 なくあまりに敵の弱體に呆き 隊の强味を信じないからでは をして居た。それは我無敵艦 言はぬがどうもそんな顔付き た。皆んなの人達も口にこそ 私自身の耳を疑うた位であつ カリフオルニヤ等々米國虎の クラホマ、メリー かアナウンサー 次ぎ次ぎに來 實を言うと の震え聲が ランド、

國心の發露である。 界を驚倒させた戦史未曾有の 方々の尊い働きによつて全世 るニュースに我海軍 ではあるがまことに偉大な愛 た。皇師の前には當然の結果 大戦果を擧げられた事が判つ 正に世界がデングリ返へる の勇士の

いたつ この感激を表し得ないけれ共 當時の感想を書かせていたど で私如きの拙い筆舌には到底 と言ふあまりに大きな事なの

特進に還らぬ御靈今榮える 舊拙作を皇軍勇士に捧げ奉る 車

宮 岡

イラル

二月八日午前六時步哨交代。 中迄氷が張つてゐる。 ら上は雪の人形、眉毛も鼻の 聲三ツ四ツ、寒い。注意をし し」の報告を耳にした。首か 姿を見送る。 『立哨中異狀な てと不動の姿勢で防寒服の後 今より××に服務しますの 曠野の一角で時は十六年十 米突凍結の地、 澄み切つた北溝の空、 ホロンパイ

目玉は氷の奥から黑き光を

スタートとも云ふべき第

主治効能

感冒、肺炎、肋膜炎

ロイマチス、神經痛、打撲痛 氣管支炎、扁桃腺炎、中耳炎

昨日より約五度ましだとペン スレ「始ツ」。五分、六分、 もして乾いた布で手で軽くコ 凍傷豫防帽子を取れ、マスク 發する事四回、「休ツ」今から あります」そうか、御苦勞。 の氣溫零下三十七度と少しで 假眠せよ、三人連れで。只今 は銃前哨十五分、おい上等兵 ートブの近くへ來イ、××兵 十分、よし「止ツ」。御苦勞ス 送つてゐる。「御苦勞」の連

> 兵隊の姿は直白き野のあちこ 分、東天は少し色づいて来た。 雪の中へ長靴を運ぶこと五十 なんだ靴が凍り附いて來る。 を肩に出かけた。パリパリ。 巡察だ。鐵帽背中に着劍の銃 に向つてゐる事十分、今から 地だと一人つぶやきながら机 三四尺の處だ。徹底した寒い の室内で真赤なストープから が張つてゐる。駄目だね、此 た。萬年の筆の先には青い氷 分報告用紙に一字二字亦凍 る。ストープへ近づける事五 を取つたがインクが凍つてる したのであります。 河の眞中を見つめて一日を過 ある事を心して凍結しきつた

京 福 田 山 হায়

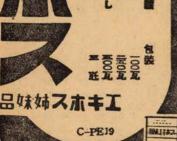
東

法人東亞交通學會の事實上の 日は小生の關係してゐる財團 とを甚だ恥しく思ひます。當 はつきりした記憶のないこ 一回 制で薄暗い部屋であはただし 緊張感を持ち續け乍ら燈火管 ニュースをそのま」胸にして でした。やつたなと言ふ朝の 理事及評議員會の開かれた日

雪の中に並んだ。「捧け銃」歩 上の重大な任務が果せられて せてゐるかの如く見うけられ らは南方へ南方へと心を走ら 中迄叩き込まれた。兵の口か 全員の耳の中へいや頭の中の の上げられた事も敷時間の後 哨の目には涙さへ光つてゐる ッパの音が流れて來た。全員 ちに動いてゐる。遠く起床ラ ました。然し我々にはより以 此の朝は此の日は此の戦果 が致します。 ひ出しても血湧き肉躍るの感 なに待つたことでせう。今思 詳しい放送のあることをどん ないかと思ひます。ラデオで その日の夕刊で知つたのでは す。ハワイ爆撃のニュースは く會を閉ぢた記憶があり

ばならぬと思つてゐます。 會もこれから大いに發展せ 日にスタートした東亞交通學 されて参りました。十二月八 榮圏建設の地歩も次第に確保 はその後行くとして可ならざ かつたのでせう。大東亞戰爭 くて癖かに筆にする餘裕がな おりません。感激があまり大 はどうした事か詳しく認めて るなき大戦果をあげて東亞共 續げてゐるのですが、この日 元來自分は十數年來日記

一、本劑は長時間使用出來るやうに工夫してありますから持續時間は任意にし に留意して製造せるものにして用法も至極簡便、安全なる粉末素布職なり 今般エキホス姉妹品として發費したる本劑は喜らその態効並に持續時間の永興 て支差へありません





よしありごと

沖 野岩三 郎

柳雑誌」である。 ず麗む雑誌が二つある。一つは正木 吴氏の『近きより』他の一つは『川 そのうちで始めから終まで一字残ら 毎月十敷册の維誌が配達せられる

誌』を敷册に製本してくれろと頼主 綴ぢてゐるのを見て、あの『川柳雜 に、私を訪問した時、私が古雑誌を てゐた小泉秀之助氏は此の六月の末 を持つて歸つて、ていわいに保存し 脳溢血でぼくりと亡くなった。 ころがその一週間ほど後に小泉氏は れたので、私はそれを引受けた。と 數年前から私の證んだ。川柳雑誌

の七月號から九月號まで封のまくに 雑誌の整理をすると、『川柳雑誌』 けて行つたが、此のほど歸って來て 間高原に行く。今年も七月から出か 私は毎年夏から秋にかけて信州淺

て何となく寂しかつた。 しまったが、小泉氏の事を想ひ出し 『川柳雑誌』三冊をすつかり讃んで 私は雑誌の整理をしたあとで、

という話であつたが、私はいつもろ 宇氏の門人で旬會で時々天位を取る 月教育難誌に發表してゐた。伊藤松 らと高等師範の同期生で兩氏は親交 泉氏は生涯何干旬の俳句を作つて毎 が深かつた。そんな靄であつたか小 小泉氏は秋田縣人で坂井久良岐氏

> はないと言つてゐた。 た。が、坂井氏は小泉君のは川柳で の作を俳句でなく川柳だと言つてゐ

たといふので、どんな句かときくと に來て、今朝ほととぎすの句を作つ 小泉氏は亡くなる前の日、私の所

尼に眞浦見せよと啼くかほ

誌』の徹底的愛讀者であつた。 小泉氏が鮮世の旬がこれであつたこ 私は唯呆然としてゐただけで何とも か。それは兎に角小泉氏は『川柳錐 とは、何と批評してよいのであらら 學校長を長く勤めた正五位動五等の と、いふのであつた。それをきいた 脚範出身で福島、福井、長崎の師節 言の批評もなし得なかつた。高等

に忘れないである。 取る鰹のすし」と言つた。無論それ 浦某といふ男、私に鰺のすしを馳走 麟を『せに』といふ。 材木商人の日 は古旬であらうが、私はその旬を今 しながら、『せに取つてまたぜにを 熊野では鰺の尾に接した所の荒い

引き切って壁をつぎ足す鳴

にあつた句である。作者は俳句だと いつてゐたが、私は今に川棚だと思 私が少年時代に融んだ新聞か雑誌

> を割んであると、その中に、 してゐる頃、私は船室で冒頭の書物 龍田丸に乗つた。船が印度洋を通過 って記憶してゐる。 昭和六年の暮にボウトサイドから

釣り上げし沙魚よりひくし

て私は記憶してゐる。 といる句があつた。これも川柳とし

憶でないとは言はせない。 でも、作者と作品とを一緒に記憶す る必要はない。記憶しても差支けな いが、作者を知らなければ完全な記 和歌でも俳句でも川柳でも都々強

何をくよくよ川端柳水の流 れを見てくらす

と朝寢がしてみたい 三千世界のからすを殺し主

襲けれた。むしろ作者を知らないで かつた時、何となく索然たる氣持に ゐた方がよかつたやうに思ばれた。 た。此の二首が高杉東行の作だとわ ことを知つたのは今年の八月であつ これが東行高杉晋作の作だといい

り聞えてゐる句は、 『川柳雑誌』の中で、私のはつき

おしろいの下は光陰矢のご どこからが足かわからぬモ たんせいのトマトほうづき ほどになり

は覺えてゐない。 の三句である。しかもその作者の名

昔の川柳研究家に平田薫胤がある

たが、川棚がよくその攻道具につか はれてゐる。 ず他の言をもつて巧みに他を攻撃し 他を攻撃するに自分の言を以つてせ 著書を大體譜んでしまつた。薫胤は 昨年の夏から平田研究をして、その

悟道者、

陽者を

属つたのである。

源

こんな句を引用して儒者、佛者、

脈よりも足許を見て醫者は

つかの句は必ず覺えられたに相違な んだ書物の名は忘れても此の中の幾

虎の鳴く聲を含かれて儒者 こまり

魯の國の僉議するまに腰か しつかりと頼むでもなし南 失念と言へは立派な物忘れ

悟道者も煎餅よりは金米糖 和尚さまよき女人だと口説 満僧も鰯の鍋はのぞくなり 蛙さへ重きに蓮に佛たち

おしやか様さへと和尚のへ

すまぬこと和尚腎虚で選化 大黑を和尚布袋にしてこま

まづき ちつとづつ出る太股にけつ

神國のひさしを借りて大伽 お仙人さあと濡手でだきお

駕へは無點かなつきは内で 大佛の〇〇〇の寸は書き殘

唐本は駕に乘る時ばかり入

變といふ逃道醫者はあけて

(その一)

で国がバッコしだした。夜遅くガラ ▼うちの猫が夜あそびをはじめたの 首を突き出して聞く方が面白い。 の爪先を立てて、人と人との間から ▼漫才は閑な時より忙しい時に聞 る寄席で聞くより

場末の小屋で、

足 た方が面白い。その意味から堂々た

れることになった。顕もヤレーへと ▼天王寺の大鐘が金屬回収で應召さ 流れ込んで寒い。

あとを締めないので、夜風がサッと ッと硝子戸を明けて戻つて來るが、

思つてゐるに違ひない。

うに思ひらかべる。 るところ」といふ古句をきまつたや そして私は「賣れ残りげに十目の見 鵬翼が費れ残つてゐるのを見かける びに、口つきでは敷島、兩切りでは ▼タバコ屋を横目で睨んで通るたん

する商賣が殖えた。 時に、路傍にシャガンで靴の修繕を ▼うどん屋の田前が無くなったと同

ある。一ペン解散した方がいいだら 驚いた。在野獣會の意氛更になしで とも角、二科のレベルの落ちたのに ▼二科と一水會とを見た。一水會は

必要だ。(不死鳥) によって叫ばれてゐる。断の一字が ▼高給料理店の廢止が心ある人たち がくだらない小説を出したがる筈だ のを覗くと、殆んど小説だ。出版屋 ▼電車の中で、婦人の融んでゐるよ

敵 14 箒 性 都 會 莨 字 は 0) 繩 煙 0) 層 多 が 石 के 打 1) 寺 井 6 れ

K

らせた父母の墓の傍にあり 宗猷高の鐡舟の碑は玉垣を 來

0

3

かな穂高

6

鎗

ŧ

す

<

東

玉

垣

6

<

鐵

舟

は

父

母

0)

そ

は

寢

0 內

は

獨 で が

身

時 を

よ

0)

散

3

頃

風

邓

な 岩 代 待 柿 は 奥 果

引

ŧ

ま

L

た 路

あ石

0)

せ

7

3

5

Ł 屋

F 根

呂 に

0)

さ

~ 0)

秋 偲

深 ば

1

ス

れ

T

西 L

Ш

青

美

金

帳

古 氣

里

2 悪

6

ほ 地

0)

艷

が

賣

場 0) 味

洋

服

0)

さ

6

或

る

女

想

ひ の映畫を見 瓦

半

E

寄

席

が

T

H

路

或る女

明

治

節 月

煉

0)

菊

を

置 H

3

0)

郎 選

+ 青 なが 6 生 5 に 6 春 活 か 秋 あ 簡 3 0) 易 束 1 0) が 夜 出 車 0) 1= 胞 中 堺 L 好 T 1= 7 あ 逃 を な 0 脲 和 10 1= 生 は 3 ŧ H 葭 け U ほ 乃

> 帽 親

72 財 案

ば 8 次

白

3 T が

警 書

防

翢 酒

美

心

配

係 ょ 食

席

課

長

Ł

判

要

0

出

世

1

8

要(44

1 (14

三宝(34)

は

11

中

0)

12 券

0)

服

E

3

T

Ŧi.

年

行函

列街

事

務

服

お

Ł

な

そ

5

1

立

ち

普

天

す

八ページに出

第

一月號

第

世の句があることを示

すのである。

表ページ敷、例へば、世田一(18) で、第用數字は其の號にある題の硬で、第用數字は「川柳雑誌」の號數

頭

所

は起

健 風晶 洗折山 2 聞 濯 5 康 L 鞄 0) 法 0) T 机 手 か 豚 通 朝 砂 0) 0) 12 0 起 が 空 か डे 华 は は を か T け ほ Ł 똚 戾 1 6 7 ょ T な 0) T 大 景 3 金 0 3 Ł 17 1) が 知 3 要 6) 5 0 形 5

水

送少腦嗜

别女

炎眠

痴 嫁 ス 平 學 は 出 美 七 な 話 0) は 女 ス 0) 後 當 1 3 力 前 承 方 6 な 知 戶 す せ 5 戶 す 0 知 美 む 0 L L < か

白 花 3 公

> 主 老 舖 に 未 練 な 鈲

大

篷

柳雞誌自一

號至二一

五

死 八(19 九 商(39 天(50

試世泣す試散 き ム 験辭 り合髪 生腹兒 一只(33 三(13 一七(16 三三(19

一只(34

1 11(18 4 為(16

1 (39

三 (32

公(18 一三(31 11(38 11(38 公(17 八0(18

11(36 九(15 兄(58 (46 至(56

至(1487) 元(17 0至(35 心(18 18 四(10

散

步

四(69 四(45 1 17

1111(33

姿

病氣 風俗、

(6)人

31

(6

柳川

類

6

文嫁月懷 十由ど病久 陳看借 當當す御金 滋 炭ピ 濕水鼻 樂かほ 年 H 院 板家 地 にれ氣の を ク 布 槽 先 し違 Ł 0 क क 1 0 1 がの振 書のの の質 の職焼 父 < 雞 氣 T おか良先 F 降庭 たひ 蚕 惠 T 菊 出 友 煙 か褒 客 6 3 生け 0 け 立人振女 5 7 5 舍 爪帽り 娘 T す たつ Ł 向 房 T 6 が 知 目 8 月 0 あ Si 穑 寄 眠 < 並 K T 0 30 0) 曹 6 廂 # は は 居 繰むゴ 0 3 髪 0 方 3 フ 3 櫚 頃中 0 あ T 曜 な 5 は は が 1 2 珠 0) n Ł が # 中 0 吳 國 程 知 = 眼の 女 は 數 0) Ł 暮 鏡 t= 口 to 兵 T 小 T 來 割 松 雙 6 量 知 村 0) 山 6 長 L 6 屋 か人 8 寄 3 たれ 方 82 負 晋 ~ 秋 5 て 浦 上 消 5 to T 金 ず 0) 6 0 あ ま な U 橋 け T 居 廖 な 0) S. 2 來 齒 0 文 3 角 井 出 6 3 着 0) 觀 た 1 か 船 司 堂 堂 蛙

6

す

は 橋

3

る

本

綠

雨

今夕 辭 腰 生 毛運嫁遠 銀 十玄十 生山初 支 橡 紙 六 ※ 着 活 那北 死 字 0) 命 け < 行 關 3 0) 雪 朝 焼 表か な芝階 崩 社が いを 2 嫁 0) 月 0) 月 幸 ~ へ京 L H L 居にの n 尚十 行行 3 < 窓 氣靴 盛 T 0 の靴忘園 加 拓 長 43 ~ 43 車 < 6 笛 6 to to 3 更旦 歸 ,眼 履れ民 叉 兵 0 < Š. を 中 顔に に 想 風 6 倒 6 n 天 40 6 隊 記 お 夜 淋 3 6 E 6 でて たれ が 3 n 向 5 ば 憶んのふ 6 鉢 待 兒 な枕 る句 < T を 北 子 吹 h は は 10 0) 0) 0 等 2 3 0 猫 3 T ょ to 3 の 選 笑 あ る T 笑 のすに 8 3 好 8 0) Ł 秋は 灯垢 風 # 3 伊 だ 死が滑の E 月 風 官 吉 る 寢 0) が U IE ほ 石 晋 池 E が 5 急 等 窓 2 L 額 古 L 吹 1 E L 1 額 田 元 行 あ 俘 0) 0) 3 夜 及 3 日 0) 云 T あ 車 田 根 びや記味 車 0 虜 兒 ひ 3 9 伊 水 湖 吐 白 水 濟 民 0 太 t 額 車 古 空 客 郎

思少素掃衰 親散昇 先盛 卒失青死 初整品主 信麥 末出正失先酌梳 相 洗 紳 對 切 談 子張直業代 髪 案年額除弱 切財給 造會 業戀春額 面列れ人 士 霜 心見 = (2 1 1 7 三只(3 到(50 (4) 吾(64 二三(32 =(27 元元元章 3 2 1 1 8 9 3 3 0 0 2 8 9 三言 **冥**(3534 图(5 图0(34 贸(53 兲(48 图是 图(35 公(14 三(52 52 次(19 图0(30 图0(14 元 高(13 四(37 图(43 公(18 黑黑 三(21 10(32 (59 5 49 44 4 8 5 6 6 6 6 9 4 三五(32 **三(52** 三分(32 10(31 101(23 一二(1 一金(1 五(3 九二(17 公(17 图(54 九0(23 天(42 丟(49 天(49 图0(31 吾(49 6 5 4

心

唯代さい雨仮 ++ 太 觀金屍 嫁離向も愛 事里白白ず泥 충 の人 てあ 担 內味出 # 14 七 のあ墜秋れに かほ 翰 振あすの 病 0 時 年 りちがば描 癸庶 來 E 6 理 阪 目 0 で るへ 話 二句 ≘ぬす紙でか T 验 代る 活な想 か 急に 0 to h = よ 旗ばいれ 向 な 戒 見 中旬そ 幣っん 字刺に か雨 名 書は T 會 な 待つ < E 12 の南 國 背ば刺な 名 れ は犬 に敏遠 Ł 0 ば 伊 國《月 埃方 旗 中か 舞 を 何 なを के つた 身 6 融 掛 が è 派 のし 妓に 3 か蓮 お 告 家に火 U E 豆 置 0) 知 母 L 埃 造 卷 は 0 讀 た 船 違 見 Ł 思 北板 木き な か 岡 黑 冬 岩 か h 3 畔 0 3 T 直 に 7) 金 6 JII 川 5 3 3 H # 2 70 h を 土出 40 3 7 出 せな 6 nt C 來 3 H 6 < す る 娘 す れ代 巢 香 在

十初 鶏賣 遙 そお畑惜彼 代 水 有一あ 走 詩英 男 セ 癎 H 年の十る 違 LE 用 0 は上槽 集 拜 0) L 3 圈 靈 郎鹹 3 朝二子 な な 品 な 卵げ 0) < は TE 立 目 ひ の月を E 畵 T せ # Ш が のは あ 口 T 根煙 感二押 5 れ 周 ま 等 が 0) 3 激句へ に 出邪超 な な が 方桁 水 0 濃 屋 よ 富 似ずの 儲 たさ な PD 0) E を 軍 C 40 0) 恣 過 宣か T 5 ど桁 3 光 # 娘 通 + す がは偉 朝 艦 が 0) が 6 帳 少妻い 喰 3 だ 秋 が 3 7= 7 6 歲 着 0 か 知 お 3 平 3 6 1 0) 奉 船 1 0) 立 な 女 南 # が か か 3 金 3 ず汚 若 ち 20 田 緯 知 知刺 終 伏 豆 大 菊 藏 西 チ 濱 娘 が 1 0) は 3 T 配 Ti. T が 事 3 闢 光 が 書 0 度 見 H < 遲 T 小 7 か 0 0) < れる 3 2 0 方 世 風 月 す 0 3 松 * 園 雄 葉 水 正

借差進寒匙きさ逆 向が加入 咳弱神サ白眞衝嫉失 出仕 消聖出新生惜相信戰察神再 が加減 經ボ 別場用爭 公(4101 天(40 西(5 5 4 3 至(50 西(57 一公(18 **関(548** 西(52 語(54 馬(50 图(50 五(4 門人 公(31) 奏(43 公(16 歪(55 歪(58 00(23 衙(55 **三(48** 至(52 10(33 五(45 西(60 五0(53 贸(53 图(50 門(69 天(50 至(50 至(52 西(50 (44 5 5 40 45 43 8 三元(32) 元(53) 10(31 11(33 104(32 104(33 一公(178 一公(13 一公(17 八三(13 八三(14 五(53

配モ御買 女丸新 枝湯せ信親富 土觀窓灯 激 そ 日勞筆 給デ令 5 刈 參 災血豆のつ濃 房 不 士面百 戰 閉 を越勵朝の金 る郷 力の 本 の土地吸へ土か川知 ル嬢 方 には 0) 山麦姓 0) 消後をm頭 3 0) 要 せの背石は園 王力の災曆産 列 は竹 囲 女 守 5 は が地な 兒 す 出 75 ば假に 者内は地の大 E 0) け房 衛 な 1 1 目 C 沓 用 寓 心な変質 T 官 は 1 丰 箸 2 ゥ 瑩 か 7 應 7 \$ 35 重事 け す 其 任 し穀 " 饭 40 2 相 梨 t 年 頑 客 召 玉 竿 役朝 が 老 は 6 1 品 す チ 旅 3 簟 T 6 あ座牧 張 0) 3 盃 一瘾 女 E 0 共 ij れ 大 は 笥 3 は < に ま Si te 待 房 氣 門 # T 45 Ł ~ 手 # 7 鰏 T 0 任 Ł < 殖 起 がび 6 3 # を 中 to そ 立 す 還 か す 戰 向 が は 清 2 3 る Ł 附 6 閉 L 知 0 5 か 戶 丘 30 は 3 か 散 to n 答かか 8 宿 水 T 0 案 か を 7 す す 0 Ł 3 6 るへ す 行 HD 17 Ш 寂 九 史 5 き 凉 T L L 坡 芳 路

20 三組じ 大お 米小影 讀 野 ま殺三俺子子慾 冬 L 夏 せ関 戰神士 器 長つ 英 # 球*1生回にを供 得 座 去 た病 ち 目男敷 樂月 な悪事な /に 用 T 車 0) E 忌似 母嫌 か 柿 0 な中 に十 ら戦争 見に へ生火 が 訓 E Ξ L 直 育たにひ か T 妆 と旬 い骨鉢 技 神旦 せ 生 氣 T # 兵 示 4 輪 T か任が 干 हे 洋 云 種 代報 たれ 幼 忘だ年站 " 2 車 0) 强 せ \mathcal{H} 7 ょ to せ 裁 のの は 0 目 い表 稚 n 部 # 母 T れ 故 出 ば 葉 學 to 6 n 熊宫 劍 T な T 回 あ 82 7 1 0) 通 E 6 校 が 尼 T 和 を 住 0 時 性 戰 手に 0 5 1= 借 to 小 P 0 近 研 # 0) 局 きラ 40 T ま 濟 酒 女 か は 10 8 6 Ł < せ 酒 T < < T 阳 色 談 11 n 生 Silv 保 ひ 石 事 落れち T け 6 T 淋 30 3 た 見 行 を 垣 標だ ぬ が 10 務 井 か to 籍記 オ 0) 田 意 72 < な 身 ŧ を 3 ほ を 語 E あ 3 れ 投。 3 () 見 舍 美 Ł 止 な * 刈 C 0 0 け n 8 3 文 萬 8 抱 0 思 知 6 す きれ 12 ひ 夫 月 的 逸 立 脃 笑

先證戰き世背新ひす背双宣成ひ忍祝新即新私出失素双素催傷手守支清生 支齒辛招祝失真皺捨失 れ違 生見り 話 病 好中婚 促兵術備 語痛抱待儀望相 二二(27 元(1 三英(30 九一(23 111(66 九0(23 20(21 八三(14 九(17 公 公(17 公(17 全台台 二(1 八(1 八(1 八(1 八(1 八0(20 至(3 八三(16 八二(15 八三(15 八三(15 云 1 1 17 1 5 1 5 17 1 5 (33 64 9 8 4 8 9 8 9 8 9 一路(15) 九二(1 元(34 三四(31 三百(30 100(36 八(20 二(1 6 4

0

來俄母入父防 俺 成 此 大 配 寄 四 將 親 す家鎌人親 が衛 珠 の臣 給 席 フ 丽 0) 院 6 0 Si 軍 子 わ K 成 事 賓 犬 炒 漆 を 先 召 金が 0) か 戀 程 競 る 巋 の係な 競 本 to ~ 內 私 見 屋 見 ず で は 硯 爭 な n 日進 ts 技 か 注 動 儲 度 な せ 子 曜 6 舞 0) T 洗 6 ば h 質 6 かい to 言 は 元 月 0 供 [1] 鍬だ 8 1) は ~ に 5 3 0) よ 遊 T 0) 5 轉 0) 時 0) 0) ts は T 专 Si 言 れ Ш 出 首 鼻 方 40 恥 落 文 仕た は 险 た h 4 方 樯 計 大 事 事 か 古 が 見 は # 語 6 す 知 0) 0 で は 0) 3 葬 な 鷄 い姿 0) 食 E 逃 低 T Ł 等 \$ ナニ 3 湯 0 北 今 H 靴 U T な 武 が 3 か 谷 賞 知 等 を る 0 何 f-ね 言 to 額 浪 前ふ を 餇 0 が 6 覺 讀 童 な が ほ 6 ひ E 生 0 脫 3 3 部 H 出 3 あ 2 2 話 Ł n T な 唉 活 け 4 香 本 び b T के た # 0 人 夜 < す # 林 れ 1 介 集 王 坊

ZF.54 な導能 運歸立母 死行生 幾 歌松 な 素 T 還 代 儀 常だ 萬 舞 集 5 43 面 か 通 動 つは れ 浪花節 欄 ょ な 着× 0) 伎 杖 3 T 0 した 有 紙 かい が の京山 放 に 耳 座 E め 似 to # 1 あ を 0 知 す 送 1 6 を 0) ナニ 兄 7 難 寢 か 0) S h 雪州に曾 仕 藉 < 話 0 ^ け T 約 家 Ł ナニ 大說 れ 0 0) 45 欠 74 目 0) 6 明 枕 陇 ば た は 列 綾 な 伸 T < 話 Ŧī. ず E を 彈 劇 治 T 0) 0) 急 か 乘 を か H M に 民 車 # 2 殺 丸 0 を ホ 男 面 7 0) 服 to 虚 す 切 明 吃 は 口 想 ッ 2 0) 11 銳 て ŧ 等 熊 泣 2 淚 や子 0 肠 は 女 手 < 歸 ŀ Si 走 竹 1 Ŀ. T 专 買 す 6 0 4 夜 L か か T 6 似 3 6 れ ひ T IE 湧 45

柳

鐵 外札趣 滿 瓶 員 米 0 味 切 を 車 を हे 6 E 土あ 6 な 瓶 は 5 鋏 病 80 鎌 代 1= 0) 6 C 倉 双 0) 3 Ł 掬 Ł C 邓 御 を 5 云 取 £ 奉 生 廮 S 公 6 活 な 3 n 女 う ち か か

光

次

窓

その二

▼郊外電車に傷痕軍人と老幼の優先 席が出來たが、 見かけたことがない。(不死鳥) る人たちが坐席を占めてゐるのを それにガイトウす

食船正初ス素底宿 後客座婚イ足力直 一只(3 11(31 10元(32 102(34 一分(31 三宝(32 101(1 三三(31 11 (32 一只(32 110(33 三只(31 一会(33 一0年(34 1011(18 1011(18 101(19 100(22 一 6 1 6 九(21 一次(16 00(22 九(21 盐 二二 17 九二(2 次(17 空(18 2(17 三年(2 3 17 4 9 4 三五(33) 10(33) 公(19)

な

をはじめ、 をはじたさいでくる。 はででに出 をはいまでに出 をはいまででは、 は機會にき を確め を確め を確め を確め。 をできる。 をで。 をできる。 をで。 をできる。 をできる。 をできる。 をできる。 をできる。 をできる。 をできる。 をできる。 をできる。

、族榮光きたないあいつの手

フレデリツク大王

デリック大王は文學す

を入れて王を追ひ出し、

三五 一諸國 三)イギリス 家興隆史



史界世 柳

(VIX)

田

王様一人の贅澤三昧に民の を現英室の祖ウイングル家が た現英室の祖ウイングル家が をはまる。大陸ハノーベルか に現英室の祖ウイングル家が をはまる。大陸の為め金を ではまる。大陸のがありまたフラン 王標に政治まかして飲みに出 フランスとイ ギリス

ニ六諸國家興隆史 飛んでくる 香車一ちようジブラルタルへ 大陸の御親類から來てもらひ

ルイ様の命だしばらく入つと

ロが手ごはい熊―ロシアと取興じてゐたスエーデン王カロ伸び様とする。 平和な熊狩に す。スエーデンをつかつて下を、ロシャは北國はてしら つて將來ドイツの盟主となる

ロシ

人の吳れた雲物で夜を徹

無土職術やゲリラ戦の本家 はこの戦の最後の勝利を占め はこの戦の最後の勝利を占め にとざめてゐたベーター大帝 にとざめてるたベーター大帝 な末開ロシャを近代國家に仕 なた、一次での名を地置 がしたで、一名を地置 がしたで、一名で、一次帝 は原始のおもかけを棄て切ら が、一方帝 はた、一方帝 二七)諸國家興隆 宿命の氷の海をまたみつめ のある熟練工が一人出來 五 史

ープロシャ 最初の冒険はオーストリヤなだけ出しに世界を通りてきながら、 方についたとられながら頑張りてがとるかがも、 方についたはずのイギリュがとるかの 日英同盟の時と同じてベルの将権をプロシャがと はずのイギリュがとるかのようちに世界、 本筆相手ではずのイギリュがと のははずのイギリュがとるかのようちに世界と のはながら頑張りてベルルのようちに世界と のはながら頑張りてベルルのようなに世界と のはながら頑張りない。 るた。ジャックを立てまわつて 初の冒険は

大けんかおやつ一人で平ける 腹を切る決心をして勝ちはじ 金持は金で喧嘩をさせておき

四)佛蘭西騏業を次の如く改む

「訂正」前回(二三)英國覺醒及

神様の章を殘して歩きに出

リス(二)諸國家興隆史(一)-イギ

(二四)諸國家興隆史(二) ーフラ

カントの認識の限界論は

さゝやきへ今度は勘でひが

み

フワウスト

D

義賊としれてよく讀

フロシャ

ローマ

君として登録することになつくないでも似つも似つかぬ文武兼備の名の大を記して、全くないでも、一人としてこの文名高きプリンスを迎へることなしに、全くない。歴史は詩

組合ひをはじめて、

熊狩の留守をねらって攻めて

剣の國やつはリ劍をすてさせ

ツ苦難時代を乗切る準備が出てナポレオン出現によるドイでサポレオン出現によるドイである。そし 來る。難時

く生き

い大ドイツ帝國の基礎を求め神聖ローマ帝國でなく、力强 るとこの選に落付く。 ベルリンは遂にベルリンらし 聖ローマ帝國でなく、プロシャ勃興ひよろん

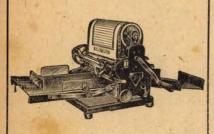
イツ

0

基礎

井輪轉謄寫機

細速妙



大阪市東區平野町二

商

電話北濱 (23) 〇三二四番 九州支店 福岡市 上西町

11

森 梅

本

山

子

遊廓を逃出しそこねた娼婦ではない

てみるより致し方がない。 られる。も少し背景が示されて居ら ぬと断定されぬ。句調などから考へ 省二 = 前二説のいづれとも解し得

やくるちやこ」ではないのか。ぞ

東魚=「ちやくみちやこ」は「ち

(105)

五

心太妾が突てちやくみちやこ

んざいに突くので、妾の育ちが思は

たゝく戸の手ハ前方に握り詰

ある。 叩くの瓦子、月を指す指となる。 の意と思ふ。戸を叩く動作の穿ちで 握り詰める。然りこの握拳も、門を 東魚=前方は「まへかた」で、像 省二=平手で叩くわけにゆかぬ。

といふ江戸語があるから、

其の轉訛

塵山=「ちやく」めちやくちや」

かと思はれる。

省二=心太でも、手際よく突いて

塵山=私には少し解釋しかねる。

(108 鹽竈の見へる二階に酒か入

せるのかもしれぬ。「茶々むちやこ」

は「、」點で、「ちやちや」と讀ま

なる言葉は存する。無暗に、滅茶苦

茶にの謂。

(106)

仇し名の逃そしないと呼れけり

く」と讃める氣がするが、或は「く 妾のぞんざいさである。原本「ちや ないと、おいしくない様な氣がする

景だ。一「なめてみ」たがる鹽竈の ら眺めては、酒の欲しくなる海濱風 客」(武・八) ある。白い汐煙が上るのを、二階か 都から來た人には、珍らしい設備で 省二=海水を煮て鹽を製する窓。

が思はれる。 東魚=海の景色の見晴らしのよさ

殿」などと云はれる場合であらうか ひ草に名を云はずに、「迯そこない

魚=後斑などうけたものが、笑

塵山=武士の後班などではなく、

親のかたきハ美しい顔

く思はれる。

塵山=昔の武州金澤邊の風景らし

た

(109

り、妾なりの爲だとでも云ふのか。 親が憔悴してしまつたのは、後添な の美しい妾だとでも云ふのか。或は 塵山=白井權八のやうな美貌の敵 東魚=親を失脚さしたのは、 殿様

も有る。 惡面と決めてかかり度いが、其反對 如く岐かる人所以。男の敵といへば 私も考へさせられた。即ち前二解の とせぬものがある。 たくもなるし、十四字詩はまま判然 「美しい」を其儘「女」の方に考へ であるので句を成すとも云へる。が 省二=「美しい顔」が男か女か、

(110 大屋と中の悪い念佛

理窟もいふ男であらう。常念佛とい 好感を持たないのかと思ふ。 はゞ商賣に邪魔な念佛めと、 ので家の借り人も二の足となる。い ふ説には賛成が出來ね。 東魚=常念佛の近くでは、陰氣な の講頭のことで、衆人の中では小 塵山=此の念佛といふのは、念佛 大屋が

黨門徒。信心不一致の句構かと思つ た。大屋が固法華、借り人が例の徒 省1=私は極めて普通に解してる

生醉の藝を仕舞と蚊かたかり

ろりと横になり眠つてしまふ。酒臭 いので蚊がたかる。 東魚=おやと思ふ間に、何時か寢 省二=生醉が隱藝をやる。後はご

てゐるたわいなさ。 塵山 = 醉態可笑又可哀。

侍を忘るゝ里子あわれ也

常の心掛けなど自ら忘れてしまふ。 行儀作法など省みぬ。氏より育ちと の家でないので、親の家筋の事や日 省二=里子にやられた先きが、侍 東魚=野育ちになつてしまつて、

無し。 云ふ次第。 塵山=實に哀れ也で、言ふ可き辭

十能の先を拂ふ大磬

く爲に、先きを塞さがれてゐては困 する心持ち。 るし危なくもある。サアのいたく 東魚=出合ひ頭に突當るのを注意 省ニ=十能の火を、早く持つてゆ

(114)**漫人の靜に歩行十二月**

るが面白い。

塵山=先を拂ふは、少し誇大であ

めて、又もや師走がきた。いかにし 省二=浪人は長いものから食い始 へぬ呵々。

山」も謳へす。 /東魚=心身共に衰へた趣。 て越さむか。沈痛な歩み振り。 塵山=口に「是れは唐土かね金

胡葱にしほれた貝の根かしれる

を聞ほして」(武・十八) がある。――「胡葱にいとまとる根 「しほたれ顔」には根がある。わけ 食べ、翌日は出代りとなるが、その 省二=雛の日は愛想づかしの鱠を

問はずして能く現はれる。 塵山=顔色の憔悴せる原因は、 言

合があるのであらう。

東魚=出代りに名残り惜しい、

朝虹に初て娵の薄あはた

楚な趣が想像される。 薄あばた。朝虹に配して寧ろ娘の清 ら、薄あばたが眼にとまつたのだ。 ので、未だ化粧前の素顔であつたか すぎの氣味あれど、作者には狙ひの にわからなかつたのが、朝虹を見る つでもあらう。平素は化粧のため 東魚=化粧前にわづかに認め得た 省二=「初て」と断つたのは作り

萬一黑痘瘡であつたらば。 る方に詠まれて居るが、私は朝鮮に 省二=古川柳では薄あばたはモデ 塵山=薄痘痕だから句に成つたが

居て毎日色々な痘瘡を見て居る。い つれにしても感じの良いものとは云 ふ意であらう。

圍れの食養生ハ隣から

る。 お隣から世話もし、注意もして吳れ 身であるから、食養生などに就て、 省二=婆やでも傭つて居る圍れの

いふ俗諺が有つた。 昔も遠くの親類よりも近くの他人と 振りの哀れさが思はれる。 手なよりは、寧ろ世間に隠れた生活 なつてゐるので、玄人上り妾達の派 塵山=現代ならば隣組であるが、

見た所利口に遠ひ奉幣使

揚にボッとして居る風貌だ。 然し「見た所」だから、本當は悧口 云つた處が、人を喰つた云ひ方であ なのだらうと沙けも打つてある。應 神社に御差遺の勅使を奉幣使といふ 「利口に遠い」は嚴しい觀察だ。 東魚=利口に遠いと、反對側から 省二=幣帛供物を捧供するために

近く寄つては拜めないのであらう。 塵山=威儀堂々たる奉幣使の行列

119 物身てものを盗むしな玉

その品玉は惣身で盗む姿であるとい 省二=品玉は玉を弄ぶ手品の事、

東魚=滿身の動作、凡て僞瞞と云 塵山=懐中からも左右の袖からも

出す。併し他人の物は盗めない。 **叉脊中の方からも、種々の物品を取**

(120)煩た證據を出セと恨られ

恨む。 煩つた證據をみせて吳れろと、女が 恵ひのために行き得なかつた。その 省二=相逢ふ約束であつたのが、

東魚=親類縁者もない人の圍れと

思はれる。 事を云ふ氣分に、娘氣のぬけぬ趣が の方から男を恨む方らしい。無理な 東魚=「出せ」とあるけれど、女

魔山=女の愚痴で男ではなからう

(121)人に女房と見せる口上

のであらう。 の上に表はす。天晴れな女房振りな 家の女房だと云ふ趣を、挨拶の言葉 東魚=女中や何かではない、この

女房とみせる」で十分祭せられる 省二=人に紹介する其口上振りが 鹿山=牛を賣り損ふ慮有り、 慎む

(122 口を吸セて兩方へ迯ケ

てゐた。日本に接吻はなかつたとの 持ちで思はず兩方に迯ける。若しや ゆべからざるものを越えたと云ふ心 句が多い。友人が拾ひ上げて研究し 人目がと云ふ怖れの氣分も手傳つて 省二=「武玉川」には「口を吸ふ」 東魚=吸はせた方も吸ふた方も越 塵山=生息子對生娘、稚氣可愛。

某學者の説は、 123

直に破れてしまふ。

る。それも因緣だ。一殊に不治の患 者などに於て。 事情にまで及ぶ。いくらも其例はあ 病人に戀愛をさへ感じ、段々複雑な 省二 = 親切に看病されるので、

どうも困つたものだと云ふ程のもの で、喜劇になるか悲劇になるか、そ 何ではなく、他よりそれを聞いて、 れは後日の幕である。 の戀愛悲劇に了つたのであらう。 塵山=是れは情事の結果を云つた 東魚=「因果也」とあるから、



川柳の 近

郎

海柘榴市

小さな海柘榴市観音堂がある 町金屋に民家と間違ひそうな まだ世にあらばれてゐない石 あるが堅く戸締りがしてあつ や佛像を藏してゐるそうで こともうなづかれるのである に便宜を計る宗教的な動きだ つたのである。從つてつばい 寺の人たちが、世の人のため といふのがある。 ★往古の市は今日 的な商行爲ではなく、社往古の市は今日のやうに

昔の海柘榴市の位置が凡そど 國に於ける最古の市が行はれ は云ふまでもない。單に物だ の市が物々交換であつたこと た地だと云はれてゐる。當時 遷であつたかが、地勢的に ★海柘榴市へつばいちつは我が 『唐使を海柘榴市の衢に迎ふ』 の地であつたことがうなづけ を思へば、大和に於ける要衝 とあるのもここであつたこと るであらう。 してむちうつたのもこの地で 推古天皇の十六年に

想像出來ないこともない。

かけて、今でもつばいち谷と つた。この觀音堂から東方に

してゐるのを見ても、その

て拜觀する便宜が得られなか

海柘榴市で代へた未練をはな 戀の願っはいち谷ですれ違ひ つめる つはいちへ牛を出すほど食ひ ★海柘榴市を句にする。 13 郎

やりまでして、随分繁昌した けでなく、この地で嫁のとり

つばいちの八十の衢にたちならし

むすびし紐をとかまくおしも

志貴御縣坐神 同

志貴御縣坐神社の大きな一の本三輪町金屋の縣道沿ひに 教のコンクリート塀に沿うて 道を北へ入ると忘れられた神 鳥居がある。堂々とした天理 狀である。 内の大社志貴御縣坐神社の現 延喜式によると官幣に預る式 の影さへうつらない。これが といふ姿の小さな社殿を拜 てある。

高市の六つの御縣があつて、 を奉棄してゐたのである。こ それんへその土地の地主の神 貴、曾布、山邊、十市、葛城のである。上代の大和には志 貴御縣の地主の神を祀つたも の標石が建つてゐる。 神社の境内に、磯城瑞籬宮 ★志貴は磯城であつて、志 ★ここを詠んだ句。

世も末か神様さへも左り前 郎

等を捕へ海柘榴市の亭に禁固

かこつけて寺を毀ち、善信尼

派の物部守屋が、疫病流行に

★敏達天皇の十四年に排佛

云はれてゐる。 方の檜原谷にあつたのを維新 てある。庵はもと三輪山の北 費の不動明王の像が安置され ぐらした極く閑静な小庵で國 たるところにある。白壁をめ で、大神神社からは東北にあ 現在の地に移し 玄濱庵は三輪山の西北麓 玄 たものだと

諸國に過く足跡を遺した聖僧 ★玄賓僧都は千百餘年の昔

寂した。 朝の篤い御歸依をうけたが を學び桓武天皇をはじめ、 である。 には立派な供養塔が建てられ つた。弘仁九年に八十歳で示 原谷の小庵に隠樓したのであ 名利を嫌ひ、 興福寺の宣教に法 現在の玄賓庵の背後 俗塵を避けて檜

消すやうに去つてしまつた。 作に脱いで與へた。女は禮 賓は自分の着てゐる衣を無造 り候へ」と云つたとろが、玄 三輪明神が里の女に姿を變へ 立つてゐる門をしるしに訪ね ある。不審に思れるなら杉の ろ、三輪の里山近きところで 何處に住む人ぞと訊ねたとこ としたので、玄賓は「御身は 述べて、そのまま立ち去らう になり候へば御衣を一重賜は を供養してゐたが「秋も夜寒 て玄賓僧都の庵を訪ひ、花水 その後、玄賓僧都が女の云 ★玄賓の名を傳へるものに を

さきに與へた衣が枝に懸つて 名残りをとどめてゐる。 で枯れたそうである。 れてゐたが、嘉永五年の落雷 杉は三輪の七杉の一つと云は つて神代の長物語となるのが あた。

ここで明神の出現とな つた杉をしるしに尋ねると、 曲の筋である。この衣懸の ★玄濱庵由來記によると、

H 美

川

失人カミ刀自の追悼記念として刊行 した涙の記録である。 本書は山梨川柳協會が篠原春雨氏

ある。 裝B列6號版四四頁、 原春雨氏夫人で、即君の聴音喪失後 中巨壓郡玉幡村八〇山梨川柳協會。 輯兼發行人金丸玉之、發行所山梨縣 ▼昭和十七年十月二十二日發行、 の悪戦苦闘や戦ひ拔かれた賢夫人で ▼篠原カミ女史は山梨日日新聞の篠 (非賣品) 編

集句 JII 柳 共榮圈

集酸行計劃を發表したものであるが 6號刑積綴八七頁、定價二圓五十錢 の運びとなったものである。 陸

武

同
人
諸
氏

の

努

刀
に
よ
り

漸
く
刊
行 時節柄生みの悩みにあったが川柳大 の旬集である。昭和十六年六月に旬 酸行所大連市仲町九番地川柳大陸社 **發行人高橋多佳次、編輯人小闡新吾** ▼昭和十七年十月十五日發行、B列 本句集は大陸在住川柳家一六五人

大東亞戰絕可集

高

田

抱 逸 編

ことの出來ない日だ。この日、布哇 ▼麻生路郎氏の序文の一節に、「十 興珠磯が爆撃され、世界の强國米英 一月八日――。日本人として忘れる

基に檜原神社の文字が刻まれ てあるので僅に昔を偲ぶこと

> 地はこの外に志貴御縣坐神社 神地である、倭笠縫邑の傳說

、磯城郡三輪町金屋)、

纒向檜

狀の如く衰顔してしまつたと 寛政の大風に襲はれてから現

そのかみを偲び燈籠へ手を合

笠纏の邑かめらぬか森嚴さ

郎

立派に存在したのであるが、

いふことである。

★伊勢の皇大神宮の最初の

★三輪町の名産の隨

三一三輪素麵

があるばかしだ。正面の一

松林の中に二基の古びた石燈 ところで、今は檜原に代つた らかな尾根が西北に突出した るわけでなく、三輪山のなだ 神社と云つても別に社殿があ は玄賓庵のすぐ北方にある。

搗くために用ひられるやうに ものを考察されたそれを云ふ びに大きな音がする仕掛け ひ拂ふために水の力で廻るた 書や座禪の邪魔をする鹿を逐 のである。その後これが米を 僧都唐臼といふのは僧都が讀 るが、それは見ずにしまつた の少し上にあると記されてあ 光の瀧(玄賓の瀧ともいふ) ★賭の「三輪」に主材をと 唐臼の遺跡といふのが五

と天照若御魂神に伊弉諾尊、★大神神社の古記錄による この社地が「倭笠縫邑 説地として有力な候補地とな れ社地も相當に廣く、社 て見はらしのい」浮地である が出來る。 弉冊尊を配祀したと傳へら てゐることもうなづける。 しかし三方が開け 一の傳 一般も

述べた檜原神社が最も有力視村飛鳥の六ケ所あるが、右に 村秦庄)、飛鳥神社(高市郡飛鳥 小夫〉、新木秦庄皇大神宮 (上之鄉村倭山)、小夫神社(同村 神社(纒向村纒向)、笠山荒神社

されてゐる 二柱のませし丘の草の花 ★檜原神社を詠む。

酸乃 主の神の古事や傳説を永く後 そして崇祖敬神の念があつか 孫の狭井久佐の次男の穀主とに任ぜられた。その十二世の つたので大神神社の祭神であ 云ふ者が農業に熱心だつた。 太田田根命が大神神社の神主 自分の祖先でもある大物

が川せべい わらい何 が行き Ξ

などがある。

玄竇僧都無ケなしを引いゆが

玄賓は鹿の聲さへうるさがり

郎

★今人の句を次に擧けやう

つた古川柳では

三輪の神揚句の果テに無心な

(影揚篷孤)

店 物 0

名 輪

玄賓庵農繁の子等あづけられ 無 造作に 脱ばは玄変痩せてる 玄賓は落葉の音へお念佛

★大神神社の攝社檜原神社

のものだと云はれてゐる。そ の起源であつて我が國で最古 にも傳へた。これが三輪素麵

造を創案して神前に供へ一般

のやうに細うて長い素麵の製 にすすめて、学環に因んで糸 いふことを知つたので、村民 小麥の栽培に非常に適すると

は今でも機立場と呼んで存在して穀主が素麵を製造した地 してゐるのである。 が敬神講を組織して大神 ★諸國の素麺製造組合の

ふ大きな鉢を遺品の一つに敷 衛へ素麺を盛つて出したとい て保存してゐる。 ★三輪素麵は大和平野に栽 ★三輪の茶屋では梅川忠兵 4

來にもとづくのである。 社へ参拝するのも、斯んな

由神

輪素麵がある。 ★人皇十代崇神天皇の七年 大物主 0) 神 の五世の孫

ニニニ で精製するのである。 培した小麥を精選し、 ★素麺を詠む。 一諸の神山から湧出する清水 銀の雨穀主はふと思ひつき 極寒に

> を棄わて上梓する運びになったこと ひたいといふ熱望に燃え、慰問句集 果を偲ぶにつけ皇軍將士の勞苦を犒 までもないが、その後、相次で大戦 の感激のあらはれであることは云ふ 民の感激が火の如く燃えたのである に對して宣戰の詔勅が降り、一億四 ム思ふ」云々 戦争記念句集」を刊行するのも、そ 九州の熱血兄高田抱逸君が「大東亞

6號、本文八八頁、非賣品、編輯金 ▼昭和十七年十月廿五日發行、B列 の作品が掲載され、卷末には出句者 ▼本句集には麻生路郎氏以下八十名 住所録が記されてある。

ら、三輪の里の地味を調べ、

一端にもしたいといふ考へか 世に傳へると同時に、産業の

柳維誌社三池染料支部の幹事である ▼編者高田抱逸氏は不朽洞會員で川 田市瓦町二四川柳錐誌三池染料支部 mmmmm

新會員を募る

日本橋筋三)の七階にある松坂倶樂 を創作したい人

一從來作つては
ある 部の氰生路即川柳講座へ入會された が、よい指導者がないので一向進步 りたい人▼人間陶冶の詩として川柳 い。講座は月二回、第一、第三日曜 しないと思ばれる人々は▼松坂屋(戦時生活下の常識として川柳を知 松坂俱樂部 川柳講座

受付へ申込まれたい。

月一川。入會希望者は七階の俱樂部

(作句・添削批評講義等)會費一ケ

日午後二時から新形式によつて開講

旗振つた妹 化東へ 青春の 萬歳は 家系 障子貼り 寺からの 蟻のやう動けど私慾なきわたし 交換船 子に遺すつもり 碁仇をはけまして往診歸るなり 罐ひとつ貰らうもうれし新世帯 妻死んでから 上役に 歯をみがく 兵隊みんな 見に來てる奴もあるなり靈柩車 心理・哲學冷きことば夜は瞬か 戻りが 一人現場の 用 U 念 圖 で 0) 祖國へ遠く はにかむ 良さを 富士の姿が にわれ 今度は疊 の縁談 激論悔ひぬ 便り年貢の セーラー服も 來た挨拶が E 間借で話し合ひ 切符の 週 職工の 飛行服凛々し 報 目にしみる 氣にしだし なるばかり 社員にし 認めら 堅くなり 揃へてる 事にふれ 面 東向く 嫁ぐ頃 一代目 有難さ 白 大牟田 尼 大 釉 變 颐 F 崎 媛 小 波 同 南濃路 同 同 明

戀人の

文もたのしき

若き日の 手仕事に

同

語

通

せす

買物せずにくる

朝

鮓

鰤

戶

京

都

年をあてさせて淋しい獨りも

談

所

再婚ならと

額 を見る 乏を愉しむ如く

朝霧に聲速くなるリュクサック

大

阪

夫

共

櫾

ぎ

妻

は

洋

裁

教授なり

松

うそなんか言はない様な寝顔な

選 利益追求せねばブラー 磁石とは北より外に知らぬやう 混雑の中に 服は 品 0) 牙 車 ない話 軍 室 緊張してる なりでなし まだ腹立てる 出で」涙をまた拭ひ 與へ給はぬ 丽 0 更生 白衣を 0) 秘 爪をかんである 間 一染の 密 1 見付け出し 0 神意なり 修理する 鍋になり 線も引き 時があ 大 大 和歌山 朝 阪 餌 宏 同 同 東 同 同 朗 方 野菜下けた歸り口髭邪魔になり 眼。云へば返事は顎でしてかへし 蜘蛛が巣を張っ無事なり残置燈 故郷から便りが來そう夕焼ける 映畵みる様に 負けた人ばかりのやうな競馬場 帖り交ぜの屏風舞臺は誰も居 歸ず出來て田舍はうるさが Ł 馬 汝 あく世の中に 疲れたり 仲 よ 運ばぬ戀であり < 史 秋の晝下り を 物 語

うろたへない女であつて総遠く 十六貫 擧手。禮母。あはて」手を擧ける 海越えて 菊活けて師匠をまねく部屋に"る 忙しいとこへ 縁談 逢ふ度に祖母は最後に似た言葉 おちよやんの顔、茶びんの湯氣がくる 塗つて見て洗つても見で物愛*日 往診をすませ 將棋も 見て戻り 子きっき來たお針娘がとりまかれ ーズヴェルト、チャーチルなると唇を園 一か死かまどはず猫は盗むなり 機嫌がアホらしなつた日本晴 -1 群の兵士わが子は 1 0) ス館捕虜のあくびを見て戻り 子を征かせて(三旬 ボックリ死んだ 話聞き 我が子 日本の 人形使節ゆく 君の子譽の子 すはり込み すぐ分り 大 大 大 大 間 温山縣 阪 阪 阪 飯 萬能子 剪 作 同 同 同 同 同 鱶 同 冒 同 使はないねなど」消火器笑っ合っ 鉛筆をやたらに削る出來ない子 あの醫者。また蔵一。建てるらし 期待しただけの卵をよう産まず テイールームある月當番の札がなり 母子草たとへて寮の娘をかへし

阪 同同 玉串の 間違っ。正す支那語にちとあはて この時局腸を病んで居れますか 靴で來て寺は靜かなとこでした 順で會社の

路

郞

家族手當殘念ながら彼奴に負け 繪ハガキ。足りてる母。旅ごしろ 子が征つてから雑巾を夫人持ち 見下せば 鮎を生む水 蒼く 襲する 洲龍ヶ淵 兵に水音 ばかりなり 澄む

大

阪

大

阪

奈

良

郵便と言ふものも來す山家無事 東 京

愛 媛 南

地位が知れ

島

北 支

る

西 包

尼 嵖

同 73 延 照 同 同 宙 同 同 同 同 同 同 同 同 ズ 男 2 草 月 城 ×

THE PORTER HOUSE THE PROPERTY OF THE PARTY O

枝栗も 十七時 花一輪 誰にでも行く子。母。さびしいよ 子が泣こがざあます止ぎをの風呂 **積りない生活し悟れば氣樂過ぎ** 城 紙で良し木で良し代用品の店を見る カンレ たど友と 語れば足りる 世界史の向きを變へたり柳條溝 みんなみの凱歌船出の足輕ろし 借金のないが うれしい 二階 化子でオイコラとなり子も五 行列でケンタイ期で飛んぢまひ おのが身に覺悟うながす遺書であ プロフィル鼻低からず高からず 大陸の友 チョビ髭で ンペーが大きすぎてる代理。娘 ルドミスあるお隣 フ入の智慧を借りなりなんどして マゴトの子も配給と順があり 由登録少しお世辟き言つてくれ ノ崎の 今とはんこで押した歸りやう 若 示 月 成 直 船 す いな 3 飯 所船腹不足は 町 は きつちり働く 持つて白衣は 満員電車へ 乗るつもり 寫 秋を思へと の雨 る 甥 瑞穂の民は 頭 を が Ł 番傘を上から見 同時に 松茸 ゆ 北濱の 0) 明治の 0 上を赤蜻蛉 へ嫁が來る 起し 胃が弱し 歸つて來 多く取り 虫すだく 娘が歸る 寫される 嘘のやう 影深し 純喫茶 垢落し 博士號 大 大牟田 大 大 大 布 大 東 大 金 大 Ш 大 朝 大 大 阪 阪 阪 京 阪 阪 阪 澤 阪 施 阪 鮮 阪 阪 H 十四之 風 障 風 同 輝 勇 同 青女子 同 惡源太 同 千 同 同 勢 博 同 ± 同 佳 彌 同 同 同 生 節 卿 子 光 情 記 也 傷痍席 罪のない 共稼ぎ 向ひのも菜。葉。伸びて笑ひ合ひ 逢いに行く日だとかみそり知っをり 寫眞入れたゆとり嬉しき友の文 仲居さんやはり讀めない部屋。額 作戦もさることながら 越後から苔賣りに來る娘を思ひ 直で投げてし 嘱託よなつて云ったいことが云へ 閣下とは 口だけは その頃を思はすだけの 結婚は仕方がない。するそうな 1 おしへ難い迷路のやうな俺の モンペ穿、凛々しき母に近寄らず 一十機 イヒールこつこつこつと繪画廊 刈となつて銃後のむだが見 の陽に都會の見へぬの = 槽 脚 宅 音 電 人の 車 を 杀 絆 ニホヘト鮮婦などく類笑まれ 0) 0) 川合清丸先生舊宅を訪れて 口 未還 かへつて .顔で 女主 三味線箱は 娘 人で休む 腰が抜けない 聞いて見學 終りたり まで 覗かれる舊家跡 産業戦士の 眞白き髭の 輕く合はして 皺に亡母を 明るさ 罪を造る灯 \$ 時代をはばからず 5 靜かに目を閉ぢる 乞食の 6 人の 遠慮し給ひぬ 日がさみし 膝へのせ 人同 子も笑ひ 淋しさよ 人なりき 忘れまじ 小粒です 初年兵 兵强し も良 仲悪し 流行歌 志。基 尼 西 神 京 大 布 大 名古屋 檔 德 名古屋 融 鬾 郭 島 阜 Ħ 都 阪 崎 阪 宫 島 F 瓶 根 同 同 同 干 同 ひきみ 同 同 覺 同 伶 秋 同 同 IE 太 同 百 同 同 代子 朗 史 魚 治 枝 慶 暮 志 別離の 産弊の **残業に生れさうなが氣にか」り** 山上馴々地圖にない道行きたが 佝僂の子電車の隅でちんと立 垣 限りなき 孤獨へ 絲瓜ぶら下り 看護婦の 水槽の 出 出征は 組長になる ほ」えんで街の美淡は寫され 可愛さは白系の子も抱いてゐ 軍服を着ればその氣になる步 オンドルに 日本の强さ 子供ら 機種を知 早風呂は 輕 秋 雨になり 子の征つて母親强く生きて行き 繃帯を巻いてもろうて公傷去に 迎へ 症 0) 女 3 6 目 來 F 越 陽 0) 天野山全剛寺にて × 日記は 綽名のま」で 水をしか 0) あてなく雨へ襟をたて 子供の船がよく走 櫻哭 人の ルが長過ぎて の中に 必 女割り込む み頭取るよに埃取り 器量マスクで 妻の言葉が T 判取帳に 0) 國語上手な 學歴で 少し匂ふも女です す 子供應戰する様子 秋 光のなかの大師様 時間までも書き 紅 き合ふ 小脇の へる 0) 配給酒がある 風 カビが生 なきを恥 < 明 事に馴 見送られ 當つて來 なる ひ 御歡 南 講義錄 無表情 買被り 治 8 北 節 3 る 1 大阪府 大 大 名古屋 大 大 大 大 大阪府 阪 阪 阪 阪 松 妄 茂 同 同 勿 無哲坊 同 花 み子 猼 耳 夢 來 人 子 鄎

麥酒なら いけると 婦人裁斷師 こわす船 こわす飛行機 水 兵となりきる銃 槽 0) 6 中 T でくだけた 女は低う軒を出 0) 御 米造る 豊の月 紋 章 る 青森縣 大 阪

山 妹 一菜主義 親子と知らずひやかして恥ゃかき 敷に刺されマレー語習ふ内地夏 勝つ ~ と 親子信じて 控訴院 自動車の 此寢樣巨人。アグナにふさわしく 木炭車さからふやうに煙をまき イカーが 戰 寺 熊 は 0 果 貯 は 母の慈愛の 生して法事に こ」にも 人の葬ひ 豫想以上に 貯金出來 金 歸らぬ人の 窓から見れば 混紡織は着て居ら ねぎ大根で提けてゐる 帳だけ持つて嫁し たへ間無し 身も思ひ 出る田 月淋し す か 岐阜縣 大 松 大 大 大 下 高知縣 大 八庫縣 江 阪 翩 阪 阪 阪 阪 阪 阪 風來坊 正太郎 完 初 仙 周 神 茶 六龍子 迷 郎 樂 平 生 友 混

看護婦にほれられ美男死 軍艦マーチ今日。聞いたと貯金をし まだ病んでゐますか秋の風が吹き 配給の林檎かぎつ」なで」見る 看護婦の それ程によいと答へぬ主治醫な 退 孫。様々看護婦さんにしかられる 月よ照れ横笛の主みたい窓上立ち 大戦果あけたつもりも同志討さ 院 茶 症 嗄 店 0) 0 れ 待呆け食うた 丸 T 草履は 他所行きの顔 刈 皆へ擧手の で唄ふ流行歌 これで三足目 を早 人の顔 寫眞帖 大阪府 3 L 男

重役と 一目でわかる

玄關なり

大 大 諏 大 朝 大 兵 大 大

阪 阪

王 鐵

女出

ーマネントお母うやんとは思はれ

戰

器

子

供

0)

方が説

明し

訪

名附日は家内嬉しくもめてゐる

大

阪

清柳

坊

母も來す便りも來ない秋の病床

看護婦。手ょくらべてはひっこめる

大阪府

獲

0

手

をやめ仰ぐ哨戒機 クは甘し勝てる國

大阪府 大阪府

すべ 志ける

专

鐵

の夜のミル

大阪府

人顔をする子へいたいあごます。

交叉點どなられて**あわて出

阪

昌

紙屑だけを

置いて

鮮

茂

大

詔

と 同じ日附で 預け入れ

不機嫌がなほる過程を妻は知り

阪

理惠子

甲

征、父、子供おみやけ待つ」もり

不機嫌な巡査にくどく叱られる

阪 阪

伊三郎 平

> ドアーエンデンじやが芋落したまへ締り この屑を生かすことから 噓女女 三角巾 滋養藥 辟書出して支那の地名と首ツ引 胸算用 夕風そよ吹き秋刀魚燒くにほひ お察しのよさもやっぱり鏡。すみ 自殺した氣持でやれとさとされる 七草よ 食 0 0) 咲け銃後の秋に唄があり 劾 雀のやうな 税金までは やられた様な 中 耳 能 に嬉しい 書 鈴 から 虫くつわ虫 蚊も飛べり 入れてゐず 子の育ち 顔になり 親しんで 大 大 名古屋 大牟田 淵 奈 大 大 阪 HIS 良 阪 忠 晶 瓣 幸 初 進

けを

褪

せ

し人形吳れし人遠く

大阪府 大阪府

福海庵

健太郎 佐千代 きみ子

うらめしく 見るは梢の

柿一つ

大阪府

平

大阪府

はじめ

血沈日いやに病舍は寝しづまる

トランクの一つ二つで夜店出來 ソロバンではちく夢見て病なでを 都會人田植するとてカメラ向け

大阪府

大阪府

遊ぶにも 勝將棋

警報下モンベばかりの街のやう 中の我りすぼん丸を撃沈 米酸の潜水艦英兵俘虜を輸送 ひろし

甘藷拔り抜けたる土に月がさし 夕凉みおなじ浴衣の患者と逢 叱られた事も書いてる午後の文 看護婦も内へ歸ればモンべはき 大阪府 大阪府 大阪府 大阪府 善太狼 幸一 郎

新聞の 月更けて 俺と芒と 居るばかり もの思っせよ。雨だれよくひどき 幼子を使ひに出してそつとつけ 歸還兵に何がなんでも嫁にやる 治つた様な顔をしてゐる不養生 空氣浴こくにも一つあるほくろ 菱の實をおやつに母が笊で出 料 券 0 兩陛下より練乳御下賜さる 誤字までさがす 御 百 點 母 殘 貴 L 3 病み續け 野 日曜日 良 大阪府 日本晴 蘭 はる代 青 利 ラ 無 芳 イラ 郎 衣 朗 川研究(二三)を披いて見

る。ここにも、

賑やかな事である(以下全部古

口どめをきれいにされた女郎

西 田 艸

ケンが咲き山裾にはフジバカ 様に ヒガンバナ ヘマンジュシャ 艸會の採藥行で、南海山手線 た。田の畔に火が燃えさかる 日根野驛から、犬鳴山を經て 水間観音に出るコースを歩い 去る九月二十四日、例の本

が深かつた。 たりと覺ゆる女郎花がころか 栗の如しとは、よくも表現し そよがせてゐる。けに蒸せる 菊がつ」ましく咲いて凉風に 盛りと花をつけ、その間を野 しこ、いよいよ秋だなの感じ サワヒョドリなどが今を

今配達された十月號の「川柳 文に盡すべくもない。たつた 來此の花を愛した事、到底短 俳句に敷限なく、日本人は古 郎花、これは謡曲を始め、歌 味がある。文學に現はれた女 雑誌」を手にして、例の武玉 女郎化、科學的に見ても興

など、口達者のがある」(東 われ落ちにきと人に語るな、 「落馬で尻持ちをついても 省二の三老の評が又面白い。 句が目につく東魚、塵山、 女郎花ころべば只は起られず 簡にして要を得た評釋で

現はれた女郎花の一部分だけ きと」に關する澤山な古句が いけれども、少し解説をつけ 誌」を讀む人々の爲に野暮臭 を書いて置かうと思ふ。 あることも紹介して、文學に て見やう。この「われ落ちに 名にめで、折れるばかりそ女郎花 そうだ此の評釋は「川柳雜

とばかり囃し立てるさまは亦 て見てでもゐたかの様にワッ 即ち口達者な譯であるが、昔 て右の歌を詠じたといふのが り咲いてゐる女郎花を折取つ の川柳子その落馬氏を取卷い われ落ちにきと人に語るな 僧正遍照が馬から落ちなが 負惜み强くその手であた

て人の悪い。こんなのがゐる るるのやら、お怪我は?なん お打身は如何扨々よいお歌 同情してゐるのやら難して

何の何の人が知らいでかそれ 馬から落ちて腰折れの名の高 面の皮厚く名歌が一首出來

僧たるものが、 の悪いばかりぢやない。一體 い坊さんだ、いや往生ぎわ 花もの云はねど落馬人が知り 知つてますぜ。往生ぎわの

んたは女の子に見とれたつて 遍照は女に何の用がある 女郎花ばかりぢやない。あ

事を多勢が言つてゐますよ。 天つ風雲のかよひ路吹きとぢょ 名にめてゝ折れるはかりに落 どうです。 とどめたは乙女落ちたは女郎 とは如何。だからあんたの 乙女の姿しばしとどめん

> は直接關係はないがやはり句 和らかに口どめをする女郎花 遍照は腰うち歌もよんだ人 ざつとこの様な調子、次の 落馬にも懲りず乙女を呼びた

親の爲我落ちにきと女郎花

親戚から一尺五寸位の生きた鯉を貰

刺し身にして食べとくなばれ」と

高橋かほ

街に住めば

花より外に知る人はなし御落

馬糞へ落ちし一ト本の女郎花 (宿場女)

あるが、多く女郎のことを詠 似世醫者と人に語るな女郎花 女郎花の古句は右の他にも (醫者に似せて坊主の登樓)

夜は腹てしまいました。

と思ひ盥に水を張り鯉を泳がせて其 んとか成るやろ明日は板場に轉業や 分なら鯉の料理も鮮かでせらが)何 料理なんてヨーしまへんけれど(銀 ひましたが刺し身どころか私は鯉の

引け前の籬しをれた女郎花 つお茶つ引き

花の里芥子から育つ女郎花 (禿から育つた太夫)

御神事は泥中に咲く女郎花

(住吉御田植・乳守の遊女) monumen

お手入れをいふ日陰の女郎花

はした何。

私も殺生致さず手もよごさず共に芽 に濟んだ鯉も命拾ひをして幸福なら 流れて行つたのでせら爼上に上らず チーへ跳て盥を飛び出し溝から川 の姿が見えません鯉は一夜の中にビ さて翌朝になりますと盥だけで鯉

長 醫學博士 井尻辰之助

皮泌尿器科 大阪市南區千年町(島之內警察署横 華陽堂

19

電話南個四四七五·二一八五番



母を半分失」記

中 島 生

文字は見當らぬでせる。平素病身で 加減は恐らく言海を探しても適當な がやつと半月振りに歸つて來ました なんと形容していゝかその腰拔けさ 今度と云ふ今度は驚をき通りすぎて お見舞有難ら。色々御心配かけた はなかつたのです。 を示す事を一家の家長として忘れて は或程度の强がりと餘裕らしいもの 場合の心構へに就て妻と打ち合せを した。しみつたれた語だが妻の前で 一應歸宅、夕食を急ぎ乍ら萬一の

來る時が來たさと妻へ强く

の心の動き觀れは。

今日の今日こう迄もろい俺

はあり老年でもあり凡その覺悟は私

にも出來てるつもりだつたのに。こ

をくつと我を忘れて抱きしめました 時も肌身離さぬ内ボケットのお珠敷 ずには、居れませんでした。前晩の なって終った事はしみんくと感謝せ 母の許に着いた途端に汽車が不通に …今でも身の毛がそつとします。何 「ふじ」に乗り込んでなかつたら: から九州かけて大風害のあつた日で のも有難いが、翌日は丁度あの中國 奇蹟的に「ふじ」の慶憂が取れた

讃みかへして見てもそう書いてある

讀みかへし讀みかへし母病

むを讀みかへし

いでを乞ふ」と弟からの電報は幾度

午前の宅診の最中に「母盲腸炎お

拜む心 大いなるカ 身近

せつけた子の慰めけ云けせもせず、 込まれて居ました。而も遙ると、馳 酸で病身な母の顔にふかんくと刻み す。數日苦しみ扱いた疲れが六十八 ない願ひを掛けて來たのも水の泡で 主治醫の誤診であれかしと、はか

地で廻り、その間にも幾度かくしゃ をすました後往診の約束の分を夢心

人になった電報をひろげては引き

入れられる様に置みかへすのでした

電文を合ひ間合ひ間に又ひ

しいし、やつと十七時近く外來患者

患者さんに間違ひのない様に努力

しいカナであり

ハハモウチャウ電文もどか

る母の第二の言葉でした。 何と云ふ從容とした姿でせら。信 書寢でもする氣で母は死を

つたのです。「醴服は持つて來たか

子の版の疲れを案じいたわる母であ

見せつけられました。その瞬間昨日 事にまで含まれて居るのは明らかで …」騒ぎと云ふ意味が死後の葬式の よい餘り騒ぎが大きくならぬ様に: 見ると「手術するせぬはどちらでも 云ふのです。一鵬母に何ひを立てく 身的衰弱に對する私の考へ方如何と では一日や二日を争ふのではない全 來取り聞したうたかたの我が身の姿 仰に生きる力と云ふものをはつきり 談の結論は私の決意如何によって開 をも一度見直して見ました。 腹手術决行、但し外科の專門的見解 主治醫と外科醫に集つて頂いて用

す。鳴呼なまじ醫者である事が 子でもあり 俺は醫者だ、そうして母の

か夜は白みかけても私の頭のまとま お入れする勇気があるか。八月の短 ボンガーゼを入れたまるの母を相に 開腹手術と云ふ大攻撃に果して明日 許の衰弱に耐えて頂くか、さりとて 考へ扱いて見たのですが手術を避け りけつきませぬ。 の日を約束し得るか、下腹部にタン て内科隆的にこの儘の流動食文で幾 の舊作時代にも一入まして苦痛だつ た事を御賢察觀へるでせ
う。一晩中

外に手のありそうでありそ

卷のまゝ坐り込んでいつもの朝の樣 とうしくはわ起きて佛壇の前に縁

い」之れがどぎまぎしてる子に對す 々と爪立つ様に歩を運ぶ十五分間で 蟻の這ふ様に病院へ……弟も妹も賦 顔を白布で覆ふたその瞬間、何時の 弟や妹達か手傳つて新しいまつ白の 圏と外科圏に電話をして準備をお題 らかで腹部の處見や脉の工合も極く もかくやあるべしと氣の弱い妹でな 日にかは必ずあるべき母の死の光景 足袋と浴衣に着更へ擔荷に移してお 組の方々で運んで下さる事になる。 院までの距離が近いのとで擔荷を墜 ひし、街に慶臺自動車のないのと病 上等。私の决意が茲に出來た。主治 らひの愚ろかさを知らして貰つたの 五分間許り日傘で炎天を避けながら る事も出來ませんでした。擔荷は十 くとも瞼の裏の熱くなるのをどうす です。病室に入ると母の顔は案外安 いて今更の様に我が身の小さいはか 一旬、この朝初めて目醒めさして頂

あらん この道が火葬場へ續く日も

え出して來る。 た西山老博士の姿が神々しくさへ見 れる。うまく行つたぞとつぶやかれ 職業意識らしいものが働いて來る。 動き。汗ばんだ私の指先は母の脉へ 初められました。サット一閃メスの 弱々しい老母に對する手術の神技は がて小兒の拳程の肉塊が切り取ら 西山博士の周到な御配慮によって

老醫今はつきり仁術と云ふ

を拭いて上げながら「もうぢきすみ がに落ち付きが出來て母のお顔の汗 その頃になると私の心持ちもさす

に十二禮を誦じ奉つた。觀音頂蔵冠 平素室住先生がお訓しのこの 大きな聲でお母アさんと呼んで見た みも母らしい姿になって來ました。 見えて襟足を揃えたりする身だした らそろし、麻酔がさめて來る氣配が にさへ見えるのでした。一時半頃か た着かぬ。不安な第一夜――然し輕 の九洲の端まで呼び寄せた大阪の看 看護婦に委せきれぬ私の潔癖からこ ら第一夜は更けてゆきます。馴れぬ 眠りに入つて居られる母を見守り乍 ら私と次の妹とが兩側に侍つて深い らしてやり度い気持ちで一杯になつ 下で符ち焦れて居る弟や妹達にも知 いいびきを立てゝ郷ろ心地よさそら 護婦も山陰線廻りで立つた筈のがま さまに申上げつ」も手術室の外の邸 て來ました。病室にお移し申してか ますよ。お樂になりますよ」と續け

麻酔から半分母を取り戻し

分樂と見えて輕い眠りに入られる。 に私の兩手を差し入れて上げると幾 とお譯ねになったり「少し痛みがは もお慰め申したいと背部から腰の瀑 しての私は十二分に承知の上でこの 様な忍耐は大した重荷です。

國者と る體位の苦しみ絕食斷水の焦げつく 躰でも手術部の痛み絶對安静から來 ぬ二十四時間が綴きました。頑丈な のです。こうして水一滴も興えられ 直に受け入れて輕く目をつぶられる 來る丈け辛棒して下さいと云へば零 げしいが手許にあるなら注射でも打 質察下さい。母の躰に融け入つてで で話し掛けられたり、渇も注射も出 つてくれんか」とはつきりした語調 えられる様子からやがてはつきり貸 百痛をおさせ申した當時の胸中を御 識が闘って來ました「今幾時頃だ」 明け方の四時頃になって渇をおけ

けてゆきます。 の争ひを繰り返へし作ら第二夜が明 けて私の事を案じ給ふ。こうした涙 眠りに、醒めると文化る様に押しの 私の掌を當てると心地よさそうに又 ようとなさる。それを筆ふ様にして れを氣遣つて無理に止めさせ辛棒し 親と子が別々の意味の涙ぐ

それも一寸お目醒めになれば私の疲

が干萬の力とも、そうして天下の名 母にして見ると傑が醫者だと云ふ事 射するのが私の日課となりました。 に鞭打つ様にして――大きな針で注 腿に――ふるえる指先きとにぶる心 上げるのを喜ばれるので痛々しい大 ルとかビタミンの注射等け私がして なつて参りました。それでもリンゲ 気が目に見えて來て力强い母の聲に て本格的な看護が始まる頃は除程元

醫者と云ふハンデキャップ

大阪に闘つて來ました。もう秋近い 元に滯在拔糸まで見屆けて往きとけ 御風を満喫しながら―。 全く別な明るい心をすがくしい胸 にはいく口質にしてゆつくり母の枕 ばいに擴げて別府から瀬戸内海を 汽車が不適になったを患者さん達

大阪から老練な看護婦が二人着い

醫の樣にも思へるらしいのです。

日本の母富豪はあらざりき よい日和 笑ひ忘れた人の列 魚よ魚よ 傷兵さんだ 釣れてくれ 貼紙のすべし、べからず、多い事 前 田 Ŧ. 健

安川久 留 美

陣頭指揮

評

は結

など掛

學校の誇り

角

6

はつきり石 力に望まれる

哪

五. 紅 1111 錢を烟りにしたり 應 集もう釣鐘 0 者一枚大事がり 芋を三ツば は影も なし か 接間

自裏

にも ある

ならぬ

表 慢

人間がお

氣に入り

奈良顯指田町

峯

齒槽膿瘍。眼

瞼

炎

中

芋四初短

待ちほけを喰はせ丹前着てゐるか かくばかり 妻に似てゐる 妻の母 男と男の約束 可

宵

水虫のことで醫局へ社長來る

金貯めてかくの如くに死んでゆき **街に出て光圀公を思はせる**

安般

過去帳へ和尚物價のことも言ひ 浪花節のどの瀑布もいた(し あご髭の長さをはかるお祖父さん い」なづけ家具部で氣分出して見る

若湯推して知るべし額

0)

去年の

まし

東條首相

世

秀

リュクサック三つ並んで更けかくり 選り取りの ゆとり有るから 配給へ 慾を云ひ 界 史に の品を訊いてる旅の 吾子が遺す新記 品へするどい 女の眼 兵庫縣御影町 崎 膳

長野腳須坂町 高峰 兒

助

重役作業衣 着てるだけ 局最後に少し褒め けても矢張 盲 判

一人旅 丈

田

膿症の病原菌克服作用を發揮す。 本劑は品質至純なる二基ズルフォ 故に、患者の苦痛ごする化膿・疼 ンアミド朝にして、内服により化 痛・發熱等の症狀消退迅速にして

淋疾。婦人科化膿症 短期間に根元的治癒を促進せしむ 外傷化膿·丹毒·面疔

耳炎·扁桃腺炎 色装二〇段・五〇段・一〇〇錠

之內製

東京・大

版社

企画薬店に有

OP-17

波丹 餅の

文 Ш

だが一口に糯米と言つても籾 麥なぞから作られる事は勿論 て品種も多種多様であるから to 獲種なぞあり、收獲は少くて あり、早生種、晩生種、 餅あり、有芸種あり、無芒種 の種類に因つて赤餅あり、 こしらへる爲めには其風土其 粘りの强い、そして美味しい があつて粘りがあつてチョチ 味が違ふのであるから、光澤 なければならないのである。 土質、其種類を考察して掛ら な感じのする光澤のある餅を 微粒の大小なぞに因りて各其 あり、粳米あり、精白の度合 餅は糯米から、 から、製は煎り米、 子にしても其米の粉に糯米 のあつさりしたものがあつ する様な團子を作るにはラ 肪質に富んだ、羽二重の様 粘り氣の强きものあり、粘 團子は米の 多收

い。況や、粳米を主體とし之 とうの餅や團子の味は判るま を知つてゐる都會人にはほん 屋又は菓子屋から買ふ事のみ 餅は餅屋から、團子は團子

出立、

の機會に、餅や團子をこ 嫁の里歸りなぞ、さま 生祝や、孫子の歸省、我子ののて、冠婚祭葬は素より、誕 團子や、糗粉を好んだのであ

る。

しらへて、樂しんだものであ

馬が古來如何に世の中に役 原 大研子

責任を午の年の逃げ出さぬう 馬の爲に披露して置くことは 般に知られてゐない馬の事を 迄もないことでありますが 立つてゐるかは私が今更言ふ ちに果すことにいたします。 ので去年からたのまれてるた 無益ではなかろうと存じます

馬の脊に日復をかけた馬子

髓」「赤痢」「疫痢」「猖紅 其他破傷風、「腸チフス」「 て小供の罹る「デフテリア コレラ」パラチフス」「脳脊 い傳染病に罹つた場合に御醫 清なのであります。 清は馬の血液から製造した血 者さんが御使ひになる治療血 」其他細菌に因する恐ろし 扨て皆様も御存じの主とし 馬方の話すつかり聞いた宵

來てゐるのを面白く且つ可笑

れをこぼさない様に便利に出 し、受け口は糗粉を食ふに之

しく諷刺したものであろうが

出歯は餅を嚙るに都合がよい 見せるな」と言ふ諺がある。 を見せるな「受け口に複粉を

丹波では「出齒」、反ッ歯)に餅

要するに昔の丹波人は餅や

でるあ。

れ亦容易ならぬ苦心が要るの

てゐるのであります。今試驗管に血 は血球がある為にこうした色を呈し は血液は赤い色をしてゐますが此れ こくで一寸申上げて置きたいこと

> であります。 が出來ます之れが血清と稱するもの 沈澱して上の方に淡黄色透明なもの 液を採取して攝氏四十度位の温度に 晝夜位評止して置きますと血球は

腸チフス」の菌液を別々の馬 皮下若しくば靜脈内に例へば ますれば健康と診斷した馬 血液を採取して一定の處置を を既舍から採血場に引出して して一定の発疫度に達した馬 しめたものであります。こう つて所定の高度の免疫に達せ して約三ヶ月乃至六ヶ月に亘 に小量づく漸次増量して注射 清なのであります。 デフテリア血清」 一破傷風血 加へて製造したものが所謂 デファリア」の毒素又は「 今製造の一端を申上げて見 **一ワイル氏病血淸等各種血**

類の爲に涙の注射針

此の夫々の病名に應じて造

うが此の馬の血清で助かつた はれた人々は敷限りなくある 山あるのでありますがあの は今日迄に敷へきれない程澤 とによつて生命拾ひをした方 と云ふ事を御考へになつた方 に感謝は捧げられてゐるでせ 助けて貰つたと云ふことは常 のでありますが御醫者さんに 醫者の使つた注射によつて救 ければ助からぬ火急の場合に ヂフテリア血清の注射をしな られた発疫血清を注射するこ となつて吳れてゐることを認 要缺ぐことの出來ない醫藥品 つた方々のみならず復數に やかく申す譯ではありません で無理からぬことでそれをと てゐることを御存じのない譯 命を捧げてこうした役割をし れは其の筈で馬が人類の爲に はなかろうかと思ひます。 は殆どないと云つても過言で 識して頂けるなれば馬もさぞ と同時に此の記事を御覽下さ 人でも多く馬が我々人生に必 ~、御醫者さんに感謝なさる

血清を持っていらだつ腕時

ることでせう。

かしあの世で満足して瞑目す

同時に荷車を曳いてゐる馬

のである。 ぞは、實際に於て甘くもない 程度の營利本位の餅屋の餅な れに僅か斗りの糯米を混へた

餅は寒餅を以て上乘とする

ない。仰々梅雨期や夏の土用之れに反して夏餅はうまく の長」だと言ふ所以である。 じない、これが「寒餅は百樂 固まるからヒ、割れか出來な も十分の力を傾け得られるし 收獲した新糯米も圓熟して來 鏡餅なぞに仕上げても徐々に に氣溫の低い關係から搗くに るし、粘り氣も强くなる、殊 大寒小寒の季節に入ると秋に し、長く財蔵してカビを生 最上とするのである。 と言つて大寒中に挽いたのを は申すまでもない事であろ るのが一番うまいとされるの うまいと言はれるのと同様に 餅も亦高原の低温地帯で作

の味覺が何ひ得らる」のであ ないから所謂牡丹餅としてあ 餅なども普通の餅ではうまく つき餡をつけてゐる處に先人 つて終ふのである土用の腸 へないし、忽ち上皮が固くな も直ぐカビを生じて財蔵に堪 免れないし、

搗き上けた餅に

にあつて恰も日本内地の正月 餅を戴いた事がある。此異郷 で租國日本から到來の雛詰の 先に於て在留邦人某氏の假寓 筆者甞て濠洲メルボンの旅 竈に新しい薪で、火を焚きつ

になつてしまつてるて左程う 地の夏であつたから所謂夏餅 ず恰度其頃は日本と反對に彼 されたものであつたのみなら たとへそれが寒餅であつたと しても赤道を越えて南に輸送 て忘れ得ぬ思ひ出ではあるが の餅を味ふ事を得たのは今以 でやつて頂きたいものと思ふ せんがどうか同情の眼を注い ら馬に傾まれた譯ではありま かも知れないのでありますか て人間様の命を救ふ馬である でも彼もやがては薬品となつ

親切な人間もあり水を吳れ

まくもなかつたのである。

味噌は信洲越後山陰地方が

る次第であります。 こうした催しの實現を希望す の年でもあり川柳人によつて 思ひつ」其の機を得ず残念に 思つてゐます。今年は丁度午 よつて川柳供養をやりたいと 祭をやつてゐますが川柳人に 多々ありますがそれは他日の は年一回こうした動物の慰靈 機會に致すとして私共の所で な任務を持つてゐる小動物は 尙馬に限らずこうした 重大

團子の米の粉も亦寒晒し

のである。 の習慣に從つてとり行はれる 十八日頃迄に、めいく其家 を越した糯米は多少の變化を

の二十五六日から初まつて二

波の正月の餅搗きは暮れ

傷きの朝まだき、新に

火打石 き續けた火の氣を一應打ち切 つて終ふのである。そして餅 の薪柴を捨てくこれまでに焚 を拂ひ、灰を捨て、焚き残り は竈を清掃し鍋、釜、のス、 つた。此「火替へ」と言ふの 「火替へ」から始まるのであ 火を切つて清められた釜、 昔の正月の餅つきは先づ

> で此上もない感謝と同情の念 が湧き出るのを禁ずることが 共に無言の彼等が幾多の苦痛 を忍びつどけてる姿が浮かん 轉する時皇軍勇士の御奮闘と 参列の筆者もふと想を

> 戦場に 軍鳩の代表の参拜があり當日 に戦後に戦友の軍馬、 痛な面持でありました。最後 軍犬、

慰靈祭博士感慨無量なり

を傾けた滿場の額々は實に悲 師團長閣下の哀切な祭文に耳 部隊長の愛馬深聖號等の輝や かしい動功を立てた競もあり 野部隊長の愛馬金調號、吉田 た。其の日祀られた中には北 同慰靈祭が嚴かに行はれまし 十五日大阪大手前公園廣場で 團長祭主の下に軍用動物合 因に大阪師團では去る十月

出來なかつたのであります。

夫

型

祇園光國

平

行盛

宮田斷流

雷太

軍用犬輝やかしくも名を止 の靈恭々しくも閣下など

軍用鳩一羽歸らぬ敵の空

奇姓珍名 調

田

抱

逸

夫型・商人型・長者型・學者型・詩 も内地人を抽出し假りに豪傑型・農 四萬人の中から奇姓珍名の持主何れ 七年九月現在。 理型の十種に分類してみた。昭和十 八型・〇〇型・信仰型・特異型・長 私の在住する大牟田市の或る名簿

型

丸麵三即 平忠侍四 無敵牛馬 修行紋助 高牟禮忠臣 力 怒留湯忠怒 會我將人 十時武士 轟 廻 日濶 押方七百刀 源 龍眠 無敵平久 大日南武士

今豐屋伊勢太郎 閉城 案納臣輔 內準繩 眞弓 中 東 武士 小糸今朝丸 弓立兵太郎 稻荷田稻助 是枝彥之亟 久米村四郎左衛門 內 强 大久保智惠丸 人見勇氣 會我重視

型

商

٨

型

枳

影響

百田用八

大山持富國 安田善兵衛 富田富家土 金富万宋 天法干金

智識 學 教堂 型 勉

型

柳樂喜一 逆潮川龍藍 笛木濱之助 富士崎大麓 電 梅雄 調春生 **社方鳴海** 鶴美盛男 三ヶ月 水音 行春 迫 月山 光 情光 羽立 星 光

0 型

城山 安心院妙太 穴見龍熊 森兎羊熊 桝梠 信 鮎川 圓佛 驗 光 劉足一甫 裴 倣

ホルストロム重行 事忠吉辛在石 一子石日下源龍 保 內 連 橫枕立身 上津原登子次郎 山本師團 釜 酒匂怒一

を拂ふと云ふ一種の信仰觀念 であつて、つまり總ての穢れ でんだ時なぞにも行はれたの 合のみらなず、 けるのである。 にも、葬式のあと、 に基いた行事であった。 其薪には僕だの樫の木なぞ 火替へは正月の餅搗きの場 そして正月の餅搗きに限つ 正月を迎へる 産穢れの

主婦達ちのたすき掛けも凛々 臺に置かれ、之れをあしらふ 用意も出來て搗き男の右側の てゐる。斯くてあしらい水の前に、樫の横杵を持つて構へ

用ひたのは獨り丹波の我生 のみではあるまいと思ふ。

迄に用意した糯米の洗つたの 一方では大きな立臼が廣いで蒸しが初まるのである。 りなぞ各其量目を定めて大竈 素籠に、一升五合どり二升ど を四重、五重に重ねた大きな から始められた。即ら前の晩 月の餅搗きは午前三時頃 り添つて、餅搗きの態勢が整 しく搗き男の右腰あたりに寄 餅の粘りが少くなる。それを れる恐れがある。生蒸しでは ぎては餅が柔くなつて型の崩 氣が立ち上つてゐる。蒸し過 ふのであつた。 蒸籠の最上部からは香しい湯

他方では竈の火加減もよく

繃帯を

あるが其多くは一夕抱へもあ 内庭に用意される。立臼にも 丸く刳つて作られたものが用 を胴切りにし、之れが上部を る様な大きな松の株に近い處 石製のもの、木製のものなど を握つて見て、觸感による蒸 き上る湯氣の勢ひを見計つて 熟練な主婦達ちは蒸籠から沸 まり度々蒸籠の蓋をとつて試 し加減を見るより外に手はな の薄い若嫁なぞは蒸籠の糯米 第六感の判斷を下すが、經驗 いのである。

斯くて若嫁があ

三角巾

隣席の

新

刊

白

面

X

選

搗き乍ら外にこほれる蒸しの れた藁を四五寸の幅に敷いて れを豫め防ぐのである。 立日の前、左右には淸淨さ そして此藁の上にこほれ出

ゐて、今昔の感が深い。 景が今も筆者の記憶に残つて と不束を責められたなぞの情 るので老練な、姑から其未熟

無器用な指を繃帶

理由

に困る

朝となり から知られ

した関取が

勝ちつどけ

織帶もリュツクサツク。中に入れ

ある。 出して苦笑を禁じ得ないので つて拾つて食べた事を今思ひ た蒸し米は筆者幼少の頃、

卷で敷藁の敷いてない臼の手 屈强な搗き男は手拭の向鉢

句

明日取れる繃帶の上撫で、見る 綱帯を巻けば子供は癒つた氣 繃帶を解ぐ背延びがしてみたい 綱帯の 大きさ程に痛く なし 方 正

診断と 繃帶をとけばほろく なんのこれほどム繃帯。上敵とる 繃帯へ こんな傷がと 笑はれる 繃帯が とれて嬉しい 眞ツ白に卷いて執着捨て切れず かんびようのやうに繃帯干してのり 繃帶の脚でぐんと、抜くリレ 繃帯でわびに來たのへ叱られず 繃帯をしたまく彼は死んで行き 綱帶は先づどうしたと尋ねられ 馴れず氣をもむ 救護班 眞赤に染めて 又後送 結ぶに母の 解けば憐れな俺 モンペ確かな 腕になり 子の繃帶を寒く見る 假繃帶が 母おろんの 繃帶 示 痛 指を借り くなり ・垢がおち 聲になり はず 0) 指

占領へ

繃帯へ

繃帯の

青神子樂 竹 伊 鐘 莊 古 生 はるを 宙 周

恢復期 振替で 新刊は 新刊の序文で飽きて積んどかれ 沿うて 新刊うすいこと 上へ薬の 買つた新刊 もう新刊を 科學文化 瓶 待ち詫びる 讀みつくし 面 を置 ~ 延 U

美清流坊 臥

年頃の 風邪はやたらに 首繃帯 取りに來る 道場の 隅へ 繃 帶 取りに來る 図で 繃帶一 勤勞の手の 子の傷へ 母が慈愛の 卷き加減 假繃帶 千人針を 血 大袈裟に醫者で繃帶まかれてき お見舞にきて繃帶を卷かされる 邪魔物のやうに繃帶捨てられる 繃帯をした子へ子供皆んなより (佳) 白衣もう繃帯少し邪魔にな 人)どうしたと聞い納帶笑つと (同)三角巾ちよつと娘の頭かり (同)窓越しに繃帶秋の空を見る 、軸)繃帶へ親が叱つた日を思ひ 天)繃帯を解と大地を强く踏む 地)繃帶の中で生存 笑つてる 同)繃帶に暮れる今宵の月青し 同)繃帶は指の形のまるでぬけ 同)妻。手、繃帶一寸てれて卷き 足をふんだと 逸話を多く 聞いて出る わけを親には あれから粗忽 除れて左右の 手を較べ 卷買っ 繃帯は 黑いもの で染める T 直つてき 話されず 來る T

繃帯が 糊帯の

無哲坊 吞千幽正晶彌佳寒詩照友 左 神斗王治平王春久朗二右 東狂子 惡源太 猪三 凡正 方 E 神斗王治平王春久期

路狂の中活生病闘

をもつて郷里山口縣豐浦郡黑井村で けてゐた本誌同舟近詠作家、 長逝されたことはまことに哀惜に堪

えない。行年二十九歳、法名は慧川

▼氏は大正三年三月十九日、一眞宗 性聰明不屈の精神に富んでゐた。深 守の五男として山口縣に生れた。資 川柳を愛好し、作句又凡ならざる

三原武爾氏が尿毒症併發のため、渦 四五頁 文部省 從軍記 裁斷の 新刊の 大阪が 處女作の出る日本屋を見て廻り 一脊髄カリエスで多年闘病生活を續 待ち呆けが買はぬ新刊繰つてる 新刊で書架をうづめたばけのこと 大かたを讀んで新刊買つて來る 送金へ新刊 罪を着せられる 取りこみの 中へ新刊 忘れられ 愉しさは 新刊に捺す 蔵 新刊書讀切るまでは觸れさせ 新刊の上へウツカリ蚊をつぶし 截ちあとをめくる感じも新刊書 つながつた一頁もあつて 推薦圖書を 買ひそびれ 讀んで 新刊買ふときめ 哀れは飾り ものにされ 抱へ青年 痩せて 單行本で 讀 角立つてゐる 新 舞 未だ春秋に富む身 臺 句ひと」もに開け 藤澤桓夫 ts つもり 新刊書 書 判 著 ず 南正晶士吞京 青女子 完 同 正伊武 詩路

飯である事は説明する迄もな 豆を加へて蒸したのが真の赤

亦格別の味がある。これに小 强飯は其儘温かい内に食べて

を鼠だの、鬼だの、

勲節なぞ

濃路

新刊はへ 新刊を

> 老眼鏡を 折目をつけて

O

专

莊

返しに來 寄せる

翠同

芳

新刊へ

しを以て捻り餅を造り、

の形に器用に造つて手慰みと

したものである。

そして捻り

蒸し又は御媼飯と言ふ。此御

代わる。

氏は造酒工程中の硬米の蒸

る。これを捻り餅と言ふの

い事である。

けやらぬ夜の三時頃でも直ぐ

がある。

筆者の幼時には酒蔵

度が强いので腐敗しない特質

くなり、焼いても煮ても容易 餅は日を經るに從て非常に固

太古

に柔くならないが其代り乾燥

力をこめて捻り潰すと餅にな

此御强飯を手で捻つて悠々

ては少し縁遠いものである。

あり賞玩用であつて食用とし

つる事さへ出來ないのを遺憾 き數に入つて此好物を見せま を食ふのを例としたが今は亡 起き出でて、まづこの御强飯

餅を貰つて來た事もあつた。

大體捻り餅は一種の民藝で

をねだつて菊水の紋形の捻り に遊びに行つて杜氏に捻り餅 飯が好きであつた。だから餅

筆者の父は餅よりも此御强

搗きを始めるとそれがまだ明

リエスで八幡製織所病院へ入院した 家に推されて只管柳道への精進を怠 けその柳才を認められ同舟近詠欄作 つた。闘病生活中、本誌に投句を續 の柳人とも深交があつたが、八幡の 岡下鵬の句會にまでも出席、同方面 くろがわ吟社の同人として活躍、福 ら指導をうけたのである。その後、 時で、同室の梅田麥羊氏(故人)か 手を築めたのは十九歳の冬、脊髓カ ものがあつた。氏がはじめて川柳に 上野十七八氏とは無二の柳友であ

猛暑に衰弱甚しく死期を豫感したの か旬帖に、「二三日來の下痢は大胆 ▼みさよ夫人の書間によると今夏の

(同)丸停と云ふ新刊の紙質なり (同)新刊を買つて萬年處女でき (同)微熱つゞく床へ新刊とゞけられ (同)新刊の題字へ時の人が出る (佳)新刊と四つに組んだ秋の夜 (同)捷。國。山と積まれた新刊書 (同)もう次。借手が出來た新刊書 同)新刊欄 同)新刊を二日で讀んで賣きる 一同)檢閱にちと逆らつた新刊書 同)三寒の朝 同)新刊を棚に並べるだけの趣味 同)著書として恩師、爺。新刊書)新刊は 廻り讀みする 寮 廻り讀みする 療 養 所 共榮圏の 色に満ち 國策と云ふ 普及版 新刊 到着す 喜樂改メ凡人 幽 同 竹同 同 千 悪 同 鐘 同 宙 心源太 斗 望 王路生

生

同

づく證左ならん。 し、衰弱日に夜に募る。 カタルとか、容易に態りそうにもな 御迎えの近

の句が記るされてゐたそうだ。 **類の立つ旅ではないがさり**

次に解世の句を記しておく。 くして置めない句である。 極樂はこのままゆけるとこ

ある。夫人も又川柳を愛好「灰色の しに進まれたことは婦道の鑑として 病夫と三子を抱え真節の道をひたお る。悪ぐまれない生活の中にあつて 部屋住みなれし黄水仙」の句があ ▼氏には愛妻みさよ夫人と三子とが 写真は昭和十六年四月二十四日協談

柳大會を開催された

會は二十五日午後四時▼大阪警察病 生路即川柳講座は一日・十五日午後 ら御津八幡宮で開催▼松坂俱樂部麻 院川棚會は十日午後四時▼尼崎住友 ·二十六日午後五時開講▼阪大川柳 ▼本

武句會は十一月七日午後

六時か 一時▼有恒俱樂部川柳講座は十二日

報川柳會は十三日午後七時▼大阪

され、講師は路郎主幹及び市場没食 れた。今後同病院内に川柳會が開催 良塚町の千石莊病院で川柳讔演をさ ▼麻生路郎主幹は十一月四日、府下

よし氏(大阪)は大日本興亜同盟大

が不水か無性ひげ」(不水)▼庄草

用件で類りに東上、編輯部へ書を寄 せて日く「まるで曹天さんみたいで 白面人氏(大阪)は近來農林省關係の れた由▼石曾根民郎氏へ不朽洞會員 の原の廣さに虹が立ち(八歩)▼石井 會員)夫妻を迎え、伯耆大山へ。山 轉のため多忙の三ヶ月を過された由 市多樓氏(不朽洞會員)は日本の億 八ページ)を版畫社から上梓▼多田 は十月十五日亡父君三回忌、亡母君 十四日鄉里島取へ福井哲氏(不朽洞 ▼大西八步氏(不朽洞會員)け十一月 は「威書票の話」といふ小冊(表紙共 七回忌を修するため郷里丹波に闘 子氏擔當▼戶倉幣天氏○不朽洞會員 てあなどりがたい妻の足へ哲ン大山 闕門海底トンネル完成、新驛移 栗感激の句を寄せられた「夢のやい され、翌日の夕刻、不朽洞へ來訪▼ 即主幹に伴はれて、本社句會に出席 時間歡談、夕刻鶥阪、默然人氏は路 復闘された▼和田默然人氏(清水) 別子銅山の採鎌作業に從事されてあ は廣島文理大學卒業、直ちに廣島市 競展を祈る。▼石崎柳石氏(廣島) 學校の經營に當られることしなった 阪支部の庶務部長に就任活躍されて 近江八幡の川上日車氏を訪問、約一 十一月七日、木村半文錢氏の案内で たが、十一月に闘宅、從削の業務に 文庫氏(今治)は勤勞報國際に参加 立第一商業學校に勤務された▼長野 縣小松中學を退職、橫濱に於て洋裁 ある▼勝山しとし氏(横濱)は石川 十五時二十八分闘門海底トンネル初 白合野潮流氏(下隅)は十一月十五日

川・維堺支部は十一月十八日波夢浩 子忌」(五健)▼川雑小郡支部では された。「世も人も移り變れど而等 で開く▼松山媛柳吟社(松山)では 支部同人小集十一月六日いなり茶屋 尼崎支部句會は十一月二十一日午後 月一日市多樓居に於て開く▼川・維 奉公會小郡聯合分會主催の第一回川 十月廿七日に第十五回而笑子忌を修 六時尼崎昭和在で開催▼川・维松江 十月十八日十三時から鐡道俱樂部で は下闖へ出張の途次、櫻川不水居に 日漸く生活のダイヤが平常に復され 員)は母堂大憓のため、度々西下さ 會へ勤務▼中島生々庵氏(不朽洞會 月三十日限退官、一日の休養もせず 業を最後の御奉公として鑑道省を十 は十月二十六日來社、十一月二日大 **社團法人全日本科學技術團隊聯合** 阪驛發臨張された。

▼福田山雨樓氏 た由▼濱田久米雄氏(不朽洞會員) れてゐたが母堂も退院されたので頃 (不朽洞會員)け鐡道七十年記念車 泊快談された由。「なーんだあれ

は通化省通化龍泉區龍泉ホテル事務 塚榮町區小贊町二番ヘ▼大井正夫氏 上村壽夫氏は東京市中野區橋場町 ヘ▼一志悦史氏は三重縣戸場町神 製鋼島羽工場へ▼食繭南北氏は響

風と訂正 ▼削號七頁下段二十九行目線雨は線 譏

等が本誌の賞祿を如實に物語つてみ

寫眞說明 花村・紫峰・嶺泉の諸氏 ・一甫・風情・林笑・全弘・一夢 洞・塗舟・後列、雁水・憲勝・茶堂 千賀良・岩菜女・中列、伊太古・青 二・紫香・路郎師・香林坊・乙平・ 向つて右より前列、

默然人、半文錢、路郎の三人

たと同じやうに、川柳正義派の本誌 ★皇國日本が昭和十七年を戰ひ扱い も闘ひ扱いて、好評に次ぐに好評だ

廻

我身織輪と共に居たり」

遞信病院川柳會け廿七日午後四時▼

す」と▼岩崎松代氏(不朽洞會員)

居に開催▼川・維下쪮支部句會は

二十日、第三女優子さんを儲けら げる。▼高鷺亞鈍氏(大阪)は十月 阪ホテルで取行はれた。お慶び申上 息の御結婚披露が十一月十六日新大 ▼布施筑川氏(不朽洞會員)の御会

▼辻好平氏(大阪)は白路と

不

どとは想像も容さなかったのである 木徒然」「川柳世界史」「大和篇」 よる一大快暴が決行されてみやうか ホノルル大爆撃」の大見出しを掲げ てゐる。朝日の第二夕刊は「我空軍 念するのにふさはしいものだと信じ ★表紙は大東亜戦争の満一周年を記 ★本観から川柳塔」と「近作柳樽」 ありたい。 ★本號も記事輻輳で拙稿「初等川柳 謝せずにはゐられない。 並びに愛臘者各位の絕大な支援を感 ★饋稿としての「武玉川研究」「草 てはゐるが、九軍神の特種潛航艇に の組み方を別欄のやうに變更した。 講座」を一回拔くことにした。諒恕 つた。それにつけても、寄稿家諸氏

年を送るに際して一等々々例によつ の餅を語る」杉原大研子氏の「午の を半分失ふ記」小山文三氏の「丹波 て賑やかである。 しありごと」、中島生々庵氏の「母 ★雑筆としては沖野岩三郎氏の「よ

を酸表することにした。 はして昨年の「士二月八日を訳く」 事としては五健、柳路、山雨樓、豆 ★大東亜戦争満一周年を記念する記 水車、生々庵、白峰の諸氏を煩

まだ詳報は差控えておく(路郎生) の人たちによつて企劃されてゐるが 私が川柳に手を染めてから四十周年 もいいからお世話が願ひたい。 ★編輯部に人が欲しい。男でも女で になるので、その記念事業が不朽洞 ★明春は本誌の創刊二十周年だし、

大東亞戰爭一周年記念

題

(三旬)

出來るんだから大したもの いふ師走に、川柳で越年が ★儒者でさ平仄が合はぬと 軍

時下の師走を滿喫すること 夕を忘れずに出席して、戦 べて〇秘である。 ること。(歸りには實品が包め も億障も繰合はすこと。 である。そのためには萬障 ★兎に角、十二月十一日 自古新聞か風呂敷を持参す ★下足札を出さぬので、各

句戰」であるが、內容はす 亞戰一周年」と「川 びものは「川柳紙芝居大東

柳對抗

上陸

崎

豆

秋選

(三旬)

(三旬)

子選

★本年の師走川

柳

大會の呼

征

(三旬)

奥

席·題 ★締切十二月九日着 「十二月八日」 戦争の句に就て」 夜發表) (本社大會係宛) 市 場沒食 麻生

戶堀上

通ニノ

川柳紙芝居作 田 参 戸 年 十 石鹿

日時

午後五時半開會(時間 十二月十四日

> 岡田 主催 四六(昭和ビル) 大阪市西區江

雜誌

會阪松神堺光城櫻 でありますが、さて何を送 でありますが、さて何を送 でありますが、さて何を送 でありますが、さて何を送

筋角(木棉橋電停東一丁) 南區八幡町佐野屋橋

御津八幡宮

電話南八六四〇番

田中

風葉

國民儀禮

朽洞會委員長

戶倉

普天

雨選 買品 天地人五客(各題)切手廿五枚を同封のこと切手廿五枚を同封のこと

記念撮影ー希望者に實費で半優勝者、準々優勝者には副賞生の但し優勝者には副賞生の質品は優勝者には副賞を開発を開発を開発を開発した。 記念撮影 自面人(幹事長)、曹天、風薬 一自面人(幹事長)、曹天、風薬 一年、水名、香林坊、紫香、湖心 一年、水名、香林坊、紫香、湖心 一年、水名、香林坊、紫香、湖心 一年、水名、香林坊、紫香、湖心 一年、水名、柳太、泰芳、 一年十九、角堂、美知夫、萬よし 一般、東西、田柳、双食子、春集

昭和十八年度の「川柳 ······ い場合は日定を變更。い場合は日定を變更のならない。

電話土佐堀八一六三・八一六四 一號から十二號に 第二十巻第 至る一ケ年分(参 我が社では今

受けいたして居ります。 「川柳雑誌」の代送をお引 にして とに氣づかれるでせう。 この企てが發表されてか

富夜競表・出場戦士各二名

。が貰つた方々は申すに及が戰線に發送せられました。隨分澤山な『川柳雑誌』 3

から、 大志がいかに であります。 のであります。 込みは何人分で たします。お申 たします。お申 なりました。御 さまであります 問誌代送 をお引 圓六拾錢)の慰

れましたことは も大變よろこば も大のこば はずお送りにな 非特異性全免疫 リポイド及び脂肪を主 本剤は非特異免疫學説 (適應症拔型) 体とせるものなり。 力を有する異種蛋白、 に 準據して 高度の 免疫 發賣元 给此黑田楽品商會 流感、各種肺炎、肋(膜)關 注射無痛、調作用絕無、用 性、炎虧性、傳染性、敗即 袋、扁桃腺炎、中耳炎、童 祛新軍、奏劾迅速、價格至 し農乳に砂り著効を奏す。 性、並に化職性踏疾患に對 **梅**縣、其他各科、急性、 二名西の管人 二〇三管入 一名香の養入 大阪・東京

27

0 ちあ 3 句 差 創 れ

棚 0

灯を仰



投稿清規 ▼地川月日及趣所記 ▼地川月日及趣所記 ▼地川月日及趣所記 ▼締切は毎

本社十一

月例會

述べられた。主幹の柳話は作句態度に関する れて主席、主幹の紹介に立つて簡單な挨拶を 川柳宮の重顕和田猷然人氏が路郎主幹に伴は 満堂の盛館ぶりだつた。今夏盛朝された北京 もの、又象題「神棚」の披講後、没句中の二 三を拾つて、作句上避けねばならぬ點を解説 置意等々々の久振りの顔鯛れもあつて定刻前 **輜宮で開催、夢裡、亜鈍、角堂、ともみ、** 十一月例曾が七日の午後六時から御津 十一月七日 於 御津八幡宮

者(順不同

樂・水客・夢裡・正路・利一・客奥史・風明・英雄・竇澄・夜王・ともみ・馘々・妄 雄・潮花・田菱水・不二・孤逢・邁明・逸 鮎美・帆船・かほる・青々・獣平・玲之介 然人・葭乃・アート 即・外道・正也・角堂・友次郎・司白・默 葉・八歩・嶺泉・流舟・聴舟・博也・勝太 ・孤舟・香林坊・勝重・美知天・彌生・節 ・紫香・三司・紀川・駿二・綠葉・吐空・ 郎・蜜彦・翠光・勢三・豐造・昇・乙平

征 く朝 0 0 も光り内儀も美しい へ眞摯な禮も寒 **銀題「神棚」** 祖國を 近いものにする を 下で嬉しい封を切り 試 問 淀ます 昭和の子 寢 息 神棚 までとどき 神棚燦と輝けり 稽 孤 風 美 舟 舟 葉 客

植ゑた 苗 枯れて 難 草一人延び

口癖はビールの

泡のなかに

べんちゃらの膝へ煙草の灰が散り べんちやらで蓄つた襟の皺延ばし

難草に似し生

活

口癖を眞似てお通夜の更けてゆき

籤 紀 博 孤 萬 不现 潮

郷が又始まつた膳

成費成その口癖が憎まれず

外 交はその 口癖で知られ

てゐ

彦川 也 舟

べんちやらを云ひく郷を忘れて來

べんちやらな話主人が出てと切れ たばこぼんべんちやらを聞く音にき べんちやらの種を床の間から見付け べんちやらを言ひつ」お刺銭ならべまり

不帆水

あんまりなべんちやら息子腹を立て

孤

お削等はお削等は父老けて行き 口癖を指されて 輕き悪 さ 知る

的

舟 花 斗 泉 舟

席題「べんちやら」

互選

Ŧ 某

神 日 神棚へ嫁はようやく手が届き 神棚と向ひ合せに鳴るラヂオ 松 相 神棚へ鼠足跡つけに來る 神棚に少し風あるいゝ職場 福助が盛り神棚俗めきて 神棚の掃除のあとの朝のかげ 神棚を運びそれから 荷を運び 神棚の下は薔家の色で暮れ 母に逆らはず神棚の向を變へ 瀬戸物の併神棚へ詫を入れ 二合三与から神棚は忘れてず 金刃比羅さまを祭つて舟の世帯じみ 棚へ征く日の雲灯がともり 棚を掃除しいしい嫁のこと 茸を供へ神棚せまくなり 本の神棚だつた宣撫 個 れる迄を神の灯マッチの火 神様少し座を聽り 班 干枝丸 蝸牛舍 香林坊 かほる 水 寄興史 默 夜王 生 空 平 祀 客

樂

銀題「雜草」

艸樂選

探集 帖 雑草の名もうるはしく 雑 草にころんでお 城見るもよし 難草の中で小犬が何か嗅ぎ 雑草に伏せて 敵 陣 間 雑草の 雅草の名を

石切さんで

数へられ 草の質が腹ころが顔へこそばゆし 雑草に寢て雲脚を速しと見 雑草のあまり きれいな 花をつみ **難草ではあるが故郷を思ふ草** 雑草の掲げられた ままに伸び 舞草を踏んだ地代と思ばれず 草を噛む覺悟は、既に、敵を一春み 踏れたままで 花が 咲き 昔日偲ぶ 近なり 新市街 平

お迎へが來たら來たらと日を送り

言にまで口癖を書き添へる 癖 ももう 録音で 聞けるのみ 心して雑草、も踏めつくつくし 雑草に生る力を教 雑草も 秋となりたる 質を 結び 雑草へグワンと 登記の杭を打ち 雑草の中から 晩の 膳にのせ 香具師の

本買つて

雑草煎じてみ **雑草の今日は博士の手にふれて** 雑草は天から 降つたやうに 生え 打明ける迄の雑草携られる 我不翻焉と雑草咲いて枯れ 草の中でカマキリ乾からびる 草の中で野菊は凛と咲き 間 草 夜王 寄興史 美知夫 蝸牛舍 卿 正 茂

トーキーへ癖まる 出しの 漫才師 口口の通りに次男海を越え 口癖にしてはむかつく事を云ふ 口癖と 知らぬ 意見へかしこまり 親友の口癖と知る電話 口癖を使りでよこす一國の一祖 口癖にもう合はないと言ふ女 口癖を電話の側で教へられ 口 癖を電話口から取次がれ 叱 りは 聞かず 口糖敷へてる 癖を出して課長の氣嫌よし 癖の父に似たのもおもしろし 席題「口癖」 某人選 Ŧ 巤 ともみ 翠

花光客

叉 言ふてしもた 口癖おもしろし 口癖がないものとなる遺骨 御失敗以來の口癖聞あきる 口癖にしても 飽かれぬ 美辭麗句 口癖を取卷連は 口郷へビールの 泡が付いて 居る 厭世の口癖も止み子を抱 母の口癖電話では聞きとれず 癖が 友として口癖へさからはず 出ると 有利に 基が 轉じ 酒を淋しいものにする 心得る 某 卿 默 水 八 夜

> 步 司 Œ

屋上へ來て風呂敷をつくみかへ 孫を見に來た母の風呂敷 風呂 敷の捌き上手な 栗 賣り 御主人も 風呂敷持つた 配給 日 紋付の風呂敷で來る內配 留守番へ風呂敷のまま置いて去に 風呂敷を四つにたたんで世籍を云ひ 風呂敷で女中氣がるう住み替へる 風呂敷も一緒に結ぶ新家 つぎ當てた風呂敷之も長期 風呂敷のしみに暮しをにじませる 風呂敷をうやくしくも偽物出る 呂敷の隅に小さく女文字 呂敷をきつちりた」む目出度い日 呂敷も娘としての色と柄 席題「風呂敷」 庭 職 八步選 勝太郎 干斗 青々 Ŧ 紀 紫 JII

おべんちやら何はなくとも座がきま 髪結のべんちやら磯見なをさせ また何かたくらんでゐるおべんちを べんちやらへ猫はあくびをしてる也 べんちやらの包みへ倍にして返し まんざらでないべんちゃらへ椅子を向け 、んちやらを云うて荷物を持ちる んちやらのぐつとつまった無村の旬 干技丸 翠 三司 鮎美 美知夫 狐 獸 光 舟

梅田支部句會(大阪

夜の馬鹿足の裏まで蚊に咬まれ 夜の馬鹿何思ひけん詩を吟じ 夜の馬鹿叉法善寺通りぬけ 夜の馬鹿交番の灯にかしこまり フト醒めて財市しらべる夜明け方 制像が動くと見えた夜の馬鹿 夜の馬・鹿・南京虫を取つてゐる 夜の馬鹿肥料汲む牛について來る 夜の馬鹿近所の犬に吠えつかれ 夜の馬鹿足の先きから冷へてくる 夜の 馬鹿ット置く盃の 白くして 夜だけの 馬鹿ですよつとすまし込み 終鋭をたしかめてゐる夜の 馬 鹿 吾が家までどうにか臨る夜の馬鹿 夜の馬鹿老母が待つてるとも知らず 人力車で 送られて來る 夜の馬鹿 頭求書夜の

馬鹿とは

書いてなし 由 鳴 紀 翻 吐 榮 同綠 由鲇 紀 鮎 方 月 波 布美 布 玉 JII 美 JII 波 空

下關支部句會(下關)

吊皮も頭差し延べて 戦果 讃み 嫁ぐ日を 書いてポストへ 二三通 世の甘さ 辛さも知つて 頼まれる 案内の地闘へボストの位置も入れ 特報板嬉し涙の出る職果 班職果の後へ手をひろげ へ戦果が開ける有難さ 福井 九呂平 华休 不 Ш

> 征く父へ貨物の上の旗も振り 大膽な奴と嘲ける様にほめ 積残る貨物の山へ 夜が明る 操車場俺の仕分ける質車が待ち 驛の人貨物の 中から 顔を 出 敬はつたやうにポストを右へ折れ 貨物車に無質の客は便を借 市多樓 井 米 = 鮭 志

神津支部一周年句會(大阪)

身代と血筋天秤棒にかけ 血統のことで縁談まとまらず 低い鼻これも血筋の断縁にして 佗住居 左利き血筋のせいと向も乾し その昔家老だつたと一云ひたがり 先代の名に背かない初舞夢 血縁の秘しおうせぬ。目鼻だち 戒しむに 母は系圖も出して 來る 血筋など無く 孤見院の 子等歌ひ 血筋には 無いのにこの 子左利き 未商が菜葉戦士で御奉公 槍一筋征く 子に母は 云ひきかせ 英癜の血筋護りて嫁弱し 引越して一年越に顔を知り 百姓の子だと重役わるびれず あらそへぬ血筋其の子も碁を習ひ 血統は云はぬ眞面目を買うてやる あらそへぬものだ 血筋だ 別城だ 汚れた血などと 藝者の子に 生れ 三位無冠 或る日五輪の墓に 詫び 信簿あたまは俺に似たらしい 十月十二日 の血統論で終遠く 昔根はす 槍が見え 知らぬと馬力电 於 蓮正寺 香林坊報 岩菜女 干賀良 香林坊 同 不 Z 宏 林 泉 笑 水 香 C 45 甫 夢 舟 情

> 又何か買うて 戻つたうちの人 うちの人です 其點だけは 大丈夫 町内で聞合もてろうちの人 うちの人 月給日だけ良い男 うちの人 番茶を吞んで日を 送り うちの人外と家とは別な顔 うちの人この 頃一寸はげて 來か 晩酌は一合でよいうちの人 送られて 闘つて 來てもうちの人 うちの人基が好き釣好き酒も好き 本當に怒ってゐないうちの人 銭湯の大きい聲はうちの人 うちの 人初めて 知つたかくし藝 吞またけりや佛と思ふ うちの人 配給を待つ、間もうちの人のこと 共栓でうちの人しうちの人 一年目大平洋が狭まくなり **亚旦に一年の計たてただけ** 漸く母の夢を見ず 機械も僕も 張り 切つた 伊太古 香林坊 若菜女 香林坊 岩菜女 同乙 香 瀴 平 笑

四ツ橋支部句會(大阪)

山分と決まりブッーへかげで云ひ 山分を笑つて取った隣組 山分へ年寄一寸口を出し 山分を笑つて包む富を見せ 山分にじやんけんほいと手を開き 恥と恥打あけてから助合ひ 雨乞ひの歸り有難い雨に合ひ 雨乞ひの必要もなく雨が降り 雨乞ひの戻りに困るほどの雨 雨乞ひも思ひかなったタ源み 山分の語淋しく闘って 美奈子 いづみ 同 綠 甫 雨

松江支部句會(松江)

一十才過ぎ娘の齢母は満で言ひ

Z

一年目母といふ名にもう雙り 年 かそうかと 友はあぐらかく

物尺が少し足りない子の高 # オラー 於 完路居 月 龍 報 ٨

> 朝風呂を浴びて後家さん何處へ行く 無国缺動浪人をする 覺 悟 尺で紙 浪人などはして 居 小郡支部句會(山口縣) 風船を震 れず なり 離 月 見

略

母の名の手紙検閲念を入れ 其の先が知りたいとこで筆を止め 削線の香り運んで友の筆 拗ねてゐる子へ交も資け邸も資け 年間へば小さな指を曲げて見せ 勝果で祝うて出した。子の征途 冥福を祈る手 復興の槌のこだまへ雲一つ 復興に奉仕の子等の押す車 復興の街へ夜蝉の灯が赤 女房への 手紙はザット 箇條がき 魔栗の

煙は

街の角で

立ち 豊年を知らせて栗と柿がつき 復興に行くつぎはぎを笑ひ合ひ 復興の姿が見える汽車の窓 激励の手紙に滲む親の愛 沓へ焼栗だけの匂ひがし 十月十八日 於 鐵道俱樂部 间 0) 菊蕨 鯛好坊 茶目坊 并蛙 凡平 多吾作 游記

三池染料支部句會 十月三十日 (大牟田

三等局狭く貯金の人で混み 雨の日は朝から暇な三等局 内職のやう にもみへる 三等局 電波 交驚異の 戰 果 持つてくる 母さんをおどす 廊下の角で 待ち 舊式の案山子へ番窓かず 家中で三等局の事務は足り 三等局慣れて 委任の 世話もたく 馴 れた馬と別れを 惜 しむ母 等 局々長自ら忙し 於 早鐘講堂 とくみつ 世志一 天 吳 草 前 吾 子 弘

湯上りの母は夜業の針を持 新馬をば 馴らす騎兵の 苦勞知る 聲だけはしたが剣道 打込めず 父親の 聲で 氣嫌をかみ分ける かけ聲も昔のまへの武德殿 旅先で我子の 様な聲を聞き 湯上りの冷へに 気付いた 立話 湯上り のビール 銃後へすまぬ味 **浴後とて妻は新聞な ど 澱 め ず** いら立つた。聲も慈愛の母として 風呂 のよさも 夜動からのもの れやうとせぬ。母親の國訛 れ馴れしくされ初版の氣味わるし 盛の魚揃つて目が凹み ち 十四之 十四之 水 胍 秀

櫻島支部句會(大阪

バラソルの 先で愛人なにか 書き 先生の靴音きいて皆靜か ちと 遊い 柿も喰せて 喫茶 の灯 柿の木の色も舊家といふ構へ 柿を喰ふ猿は昔を知らずにあ 取りたての柿故郷の味に似て 愛人の 手柄ときいて 落着かず **愛人へ僕は下戸だとうそを言ひ** 組上

の中でこはろぎ鳴きつぐけ 新調は満員電車見合せる 凝柿 をリックに 二三入れて去に **陰電車子供の靴が残ってゐ** 征は柿の赤さを眼にのこし 風來坊 秀 水 潮 眞 溪 客 星 花

簸川支部句會(島根縣)

女性軍自信 あるのがこつち 向き ぬかづけば 又感激がもり 返へし インテリー女性といふ 姿勢にて 女とて御國を守る一人なり 十月十六日 於 甫光居 大 紅ン坊 朗 子 報

> 困つた 語に 灰 皿は 見つめられ 老ひぼれたとも言はずに馬は老さる 泣く外に手のない弱い女です 灰皿に落す無口な瞳邪氣もなく 感激に むせて 言葉の 吃つて來 感激を歩調 適拜にたい

> 感激があるばかり 人雨に電車の 音もさへ ぎられ 行列に握りしめ に示し甲子間 田鶴緒 雨 寒 朗

櫻島支部婦 人部句會 報

塗り 下駄で饗迎橋を 越えてくる スピーカが公用を呼ぶ資塚 阪急の ねらひは すごひ 管塚 歌劇出て舊温泉の灯をながめ 山越した妹も來てる竇塚 鶴萬龜子其他どうでもいくファン しつけ 糸切つて 着てゆく 資 塚 湯の街の雨にスターが濡れて來る もう 逢へぬ人と 來てゐる 饗 塚 管縁から荒神を拜んで居 竇塚一人居るのを淋しがり 誘はれて來たは雲井の居たじぶん 上級の方と出合つた饗塚 最初回來でも 温泉に入らず 九月二十日 百合枝 ひさみ 秋 子 子 枝

豊中支部句會(豐中)

仲人は豊作の田を見て踊り しみじみと苦境に立つて友を知る 舊友に逢うて うれしい 寢 臺 車 出征の友の稻田を刈る夕陽 豐作を樂しく見てる 伊勢 詣 葉書ぐらいよごせと友がやつてくる 遊園地子はブランコ

に乗りたがり 作に奉公隊は感謝され 庄 鳴 幸

> 丸刈へ散髪屋ふと子を思 散髪屋鏡に寫る菊を質め 暇なのが 喋りに來てる 散 散髪 屋話題を 襲へて 顔をそり 大日本と荷札へ太く書き 紅葉版今ランドセル 走り下り 築轉の荷 ハイカーが 紅葉の下で 飯にする 湯豆腐に浮ぶ紅葉を味へり 紅葉狩り喧嘩の人へ道をあけ あすこなら僕の名刺が幅をきて 保険屋の名刺へ父は振りむかず 新課長 名刺 やたらに 注文し 交叉點 とうーーこうで見失ひ 自轉車 がどなられてゐる 交叉點 政郷の父へ

> 荷札は子に書かせ 本人出しと書いた荷札で無事につき 配選天ニッコリ荷札見て渡し 所はと訪へば

> 名刺をすつと

> 出り 遊園地日暮れて電車 坪の庭も紅葉が秋を呼ぶ 札へ墨痕力あり 聞えて來 要屋 鮎 潮 幸 想 青 勇 白 秀 潜 明

> > 星

ZĮS

治 花 水

大 111

利

生

英麗を迎へ静かな交叉

枝

交叉點木炭バスが唸るなり

信號に夫婦並んだ交叉點

年少といはれる 知事も初 老過ぎ 初老そろく恩給の話する 貯める氣の 初老南へ 行くといふ 四十に自分がなった面 俸給日初老の顔を暗くする 夕刊に友は眼鏡が要るといふ 送金もままならず初老とはなりぬ そろしくと 初老後闘を 策すなり 十月二十三日 自 柳 春 利 生 秀 巢

乳吞見に 女中 二等で 御伴 する

便節題自薦他薦の末社

御秘蔵の植木鉢とは猫知らず 御闘宅を近所も 氣附く 自家用車 警察で旦那といへる 思が 積み ちらし壽司婆のまざつた色で出來 あら白髪と 見らしく 妻は云ふ **碁に負けて 煙草入まで 忘れて來** 人間として の上 役 批 判され 柳 同 利

松坂俱樂部川柳會 十月四日 白面 人報

ホルモンの話に彼も耳を立

川秀

花

兄のしつけ 甘い姑の 氣に入らず ちと躾せんかと或夜父らしく 母のある幸福を知る躾け糸 兄の躾け 今日も 新舊もめてゐる お供では天下の景も味が出 供待に忘れてあった講義 盛口を預けた供を見失ひ 御指南番 先づ腹切りの 法を説き 座りだこ御殿づとめを語る。祖 父征つてからのきびしい躾けなり 質刀を前に我子へ聞かすこと お供して知らない花を質めちぎり お供して來たが書類が見つからず 母の供地下一階で待たされる お供など連れず社長もぶらさがり 供なれば藝者時々辭を賜 右旦那のお供少しはいける口 春だなと女中お供を待ち焦れ 賞は 私見ですよと 味を 見 輩 のお 供でくぶる 縄 暖 雕 不 = 同 同 同 同 同 同 同 同 同

御相伴女中女中に話しかけ お供して來たが 旦那は 碁を始め 砲でも持つよ 満洲へ 連れてくれ 孫のお供コドモの汽車へも乗るなる 伊太古 香林坊 香林坊 同 也 天

お角力の假病診座や骨折だ

踊り喰ひ 鮎に 生れ

た不仕 镀

松茸の

収れやう

曲

地下鐵の故障で彼女にも會へず

吉

正

側杖を喰つて 始末書 書かせられ

又しても女中は犬に當って

柳 吉 湧 久 吉

朗峰郞三郞郞路

病兵が出て 外出もフィ に お悔みにゆけば主治醫にすまめ愚痴 お樂にと云ふまで待てず膝くずし

八ッ當り俺もついでになぐられる

松茸が游いであ

待つとこを 鳥居と定めた 禮詣り そうすると 僕より古い 大鳥居 手をつなぐ鳥居の太さ連れを呼び 其お供柔道五段が買はれ 武運長久鳥居で同く友を待ち 入營旗征くは吾輩だよ鳥居 島居から、静かになつて歩き出す 鳥居から征つて來ますとよい元氣 居から皆の足 並揃って來 街の髭の上に見 え 香林坊 同 也 司

恒俱樂部川柳會 十月七日 鋭 (大阪) 報

賣約の札へ夫人はあきらめず 後戻り したが 資約 漕 となり 玄人に 受けて 賣約 出來てゐず 夏約濟みと云はれて娘 一寸 睨め 符ち 呆けの姿母家に 見つけられ 待ち呆けに 空の青さも 糖であり 待ちぼけを映畫の間だけ忘れ 符ちぼけをくわした言う。詫び入られ 符ちほけて明日の煙草をすひつくし ちぼけへ隣の壁の 高いこと 波夢造

重賣に耐えず 病気にして しまひ スエヒロで腹痛の筈に出くわした 看板をアルミに 替へてビル 高し 看板は半轉業 ぢゃ 降ろされず 天高く看板に頭どやされた 政族にもう看板も見あきたり 板のゴテく並ぶ漢 下り嫌に太字のビャホール 十月二十二日 薬 至藝環

> 巾の利く肩書欲しい金は出す **酌動も 肩書料を取られてる** 同書も

> なくて

> 借家をまたふやし 肩書をはなれ子供の頭撫で 肩書の三つ四つを使ひ分け 肩書へ宿の亭主の 肩書を離して悠々猶ほ 肩書の手削三唱だけは諾き 肩書の除れて身軽く

> また淋し 病類は何だと 課 長 新聞は元大臣を忘れてず 実髪師の

> 口から

> 假病ばれてゆき 邪で襞であるのが芝居見に來てた 動八等の名刺出し で病氣 帰に 知ってある 巨頭 如 同同 美

大阪遞信 病院川柳會 (大阪)

圖書室

没食子報

松茸へ劉は恐怖の日がつぐき うどんやの松茸紙の様に 松茸を一つ質つて秋を知 氷削る時間だ夜汽車今通る 本當の話慾と慾との縁でした 松茸の香り豊かな御靈削 お隣りは もうカーテンの 寝臺車 植ゑつけた 松茸山と 書いてなし 松茸狩の今年は一人召されたる 配給の魚献立かへさせる イキング松茸山を 右 茸に 虫をつかせた 配給 所 馴染の薄い魚が 切り 美代子 夫 Œ

母の膝汚した頃を懷しみ

靑

柳

立膝へ早くも素件見すかされ 年頃の膝の圖さは隠され

賣遠ひ御発と下駄を 預

けら

品切れと 言へ賣約ぢゃ 断はれぬ 何百川か知らず 赤札もう 貼られ

マネキンの帶へ赤札長く垂れ

かこつまじなりはひ換へし人もある 世辭一つ云へず象牙の塔に入る 配給所商人なるを忘 衣料切符忘れて 喰べて 夜の汽車傾く 月を淋 打粉して明日を頼む日本刀 闘つて來 れかけ しく見 喜 方 同 喜 由

警察病院川柳會(大阪)

うちの人だんんくべつかしくないと 本題にはいつて膝をくみなほし 膝頭 出して 洋 裝 懸 もなし お見舞は うちの人放送したことありまんね うちの人に云はれぬことを持ち込 釘一本 打つて 臭れないうちの人 うちの人そんなカイショがありますが 石切りへ行つてくれてるうちの人 英觀の毎うちの人しのばれる 宅はまだ闘りませんかと聞きに來る あんな人でないのよ宅もお天氣よ 旦那よりうちの人だわ云はれたし 國民服うちの 人にも 似合ひます 枕敵を欺く術と知らず 如何ですかと膝で 寄り Œ 柳 白 Ti. IE. 湧 余 一久 靑 E 吉 逍 柳 柳 郎 朗 郎 郎 =

正 **警報が出て退院をすると云ひ** 退院の一艘たとも見えぬ。擧手の禮 馴れてゐるとは云へ看護婦のまま 手術室肉屋の様な前 診療へ先づ 機解から更へて 置き 手術室吸ひ 込むやうに 運ばれる 掛し 吉正五吉

郎郎朗柳郎聲

セウキウシダイキウシ酸のことをし 交

軍事訓練を受けて

徐州川柳會(徐州)

此の郷も血で清めたか一変ゆたか 海陸空一糸亂れぬ作戰 重慶の作戦逃げる道もつけ 魚屋の 生きのよいとは 常語なり 二等車に 乗つたつもりの 旅貯金 長旅は 名所エハガキ買ひ 惜しみ 九月十一日 於 民團樓上 多々良 ぼら八 のりを 八筋樓

阪神産報 川柳

男の子 好きな電車で 腰てしまひ 仲人へ 御無沙汰をして 嬉ばれ 仲人は皆知つてゐる好いた仲 仲人を ぬきに貰ふたわ しが事 座るだけと 言ふ約束で仲人上 交渉は 出來ず カン (開を行く 綱渡りする娘の影が伸び縮み 迎 勢け不利考へて置くと逃げ 人へ出す座潘團は盛り上り の子温順し過ぎて気に掛り 還兵と聞いて仲人役を買ひ 人もすつかり板に 十月二十一日 の結局 へ何度か變る座かりた 親 類とかいよく喋り 金で けりがつき 軸 治 紀 綠 行 司 男 川葉 玉 報 春 美川

もつともと言ふ交渉の眼が出合ひ

事幹と部支

大愛大松大大大松鳥島大函 阪 媛 阪 江 阪 阪 阪 山 取 根 阪 館 阪 申英柳將夢双八耕鐵綠鮎晟萬 九一 之 t 仙夫太雄裡虎瀟路州助美修し

海强鮮陽中島 支部 支部 下豐麗廣大今 麗 翠 秀 春 天 柳 美 半 紫 久 芳 里 交 米 + 花 麗芳溪巢作路笑休香雄郎九庫

> 三日尼岡堺 津神仁熊小大 日和佐支部 日和佐支部 池染料支部 山津多本郡洲 (徳島縣) 一大年田 一水井椋蝶賢美九角 林 知 將坊聲源蛙影人次夫坡堂

田米川龜大大沖鳥 村村村井谷島野山 素あれる 素あれる 表表表表表 表表表 介馬菱修村朋郎步

宋淺讓朦朦長長長田露笠片岡大長池 弘田原本村野岡崎中納原岡本道^谷澤 殿 卯 半 川 之 晴太柳辰 路直 一藏助作濱郎秀二純生方平雄徹居

主 助 生 路

古戶中川石戶高大寺岩奧永西福高橋 川倉島田井田澤西井崎村田田田橋本 生美白 風曽々根面如一八錠柳丹十艸雨ほ緑 竹天庵子人篷浪歩々路路九樂樓る雨

森藤蛭篠柴則安山箔生高谷 里子原谷田川本田方尾脇 東好省春二五留雨 波敏亮素 魚古二雨即健美迷樓即罐文

岩岡丸黑正原中石宮須妹吉市村 吉米西藤橋平田大水三內米藤岩古前 田本川岡本佐中坂谷輪藤本井崎川山 至波 萬儀靑藝夢平雨形鮎晚一志友山花北 岡崎尾田場 西曾 お根白豆九水食夢 代人花香客風む郎峰秋満車子裡 雷助美瑶造三月水美翠郎子郎石麗海

國篠富月鈴夷植逸鈴多中西小清清清魚菊杉好濱中田樱西關押佐尾布北 山見木田內川畑水水水住澤原崎田原中川尾根谷竹崎施川 山け附方筑春 休彦逸明鹿笑天竿坡櫻芳水浪子路帆潮園子仙雄人葉水栞彦を子正川巢

池伊乙岡宮野長田小松福村長水阴八井河上武谷德河浪野小飯酒小谷阿岩 水田谷島田元谷邊川浦井上野谷石竹上田田部口永野 口川尾井林川 萬崎 一零林維夜之柳恒與知交綠萬水 川一部山田側帆 湖伊乙嶺不吐三由觀帆 角井竹柳正湧一蒙林綠雅夜之柳恒與知文綠萬水心古平泉二空司布堂船哲堂蛙莊次柳三將光坊葉美王介太明史夫月鳳的虹

▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限▲「近作柳樽」は全作家の雑吟を募る 料封入の事。 一文章は二十字詰原稿紙使用の事。 め、住所氏名雅號を明記する事。大型の原稿紙に各種各題必ず別紙に認大型の原稿紙に各種各題必ず別紙に認 経切は嚴守されたし。 一書體はなるべく楷書 投 規 (川柳雜誌原稿)

下されば郵税を奉仕して直接破役致し
都隊名をお示しの上本社宛に御申込み
★母説、戦線の勇士に送られたい方は

元

日本出版配給株式會

者 本 送 名氏所住

各地柳壇 塔 近作柳樽(文章 (世紀) (會報) 集 生 生 路 路 郎 郎

選選

不組 足 一月廿日 第四號課 史濤 路明 選選

一十卷 月廿日 第三號課 北大川西 春八 題 巢步 選選

國榮 二十卷 十二月廿日 豆綠 秋雨

會協化女版出本日 五八〇四壹壹 號番員會

東京市神田區淡路町二丁目九番地 大阪市西區江戶端上通 行所 電話土佐堀 目四六番地(昭和ビル)大阪市西區江戸堀上通一 接替(大师七五〇五〇) 111 柳 /VE --= */= 雜 誌 亍社

告 置新聞紙法に譲る 禁無斷轉載 廣告部 本誌廣告に御用の節は川柳雑誌社 へ御一報下さいますやう。 本誌の刊行は有保

水

昭和十七年十二月一日發行 昭和十七年十一月廿五日印刷

價 ひます。御胜女は何月熟よりと御指示師 (大阪七五〇五〇)文は小督替を御利用 御註文はすべて前金で随ひます。振 外園途本には海外野 送料 管費の加算 半ヶ年・六册 一ヶ年・古册 册 韓居又は改験等の節は獨新併記 金金 金三

選選

毎月一回

誌 十十九 號卷

32

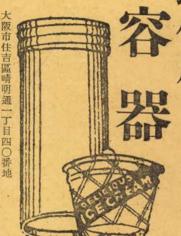
料品・菓子等の容器と して最適

組立式各種

藥品

* 食

紙 金 丸形・ 角形・ 小判形・



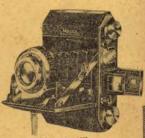
代表的國産カメラ

プロニー 16枚撮り

■型F4.5付 ¥ 117.00

F3.5付 ¥ 141.00

距離計 ¥ 21.00



(カタログ呈)

大阪市南區順慶町四丁目 電話船場905·1905·1396·5095番

電話事務所用 天下茶屋 五八八〇四三番番

柳川

街の雑香(賣切)

書・ 序文

000

生路郎著

定債の・八〇

その一句一句に、不即

一定價

田孤篷著·麻生路郎序 類例となる句が選山蒐めてある

著者一人の何作・詠史川橋の中端を 一千六百年史 空(賣切) 人の 〒定價○ 一代(賣切 の九八〇

一丁二通岸海島出市堺

洞 所行發

番二九三〇三阪大 替 振

へ導くことにあります。 はカルシュームを補給し に対応をあるらしめ「安産」 が続き、子宮の牧 があるらしめ「安産」

片瀬醫學博士 樹林醫學博士



大阪道 修

田 卯 助 商店

町

Published monthly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Nippon.

願派將必

熱煙與大神宮地宮

田神社 機井 開急奈原 古野神宮 古野神宮 天 理 既

道鐵行急西関

